

長野県松本市

殿村遺跡

— 第2次発掘調査報告書 —



2012.3

松本市教育委員会

長野県松本市

殿村遺跡

—第2次発掘調査報告書—

2012.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成22年度殿村遺跡調査事業に係る殿村遺跡第2次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成まで、一連の作業は平成22・23年度国庫補助事業として実施し、現地における発掘調査は平成22年8月18日から12月13日まで実施した。
- 3 本書の執筆は以下の分担で行った。
第Ⅲ章第3節1・4：宮島義和、同2：原田健司、その他：竹原 学
- 4 整理事業および本書作成に係る作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記：中澤温子
遺物接合：中澤温子
金属製品保存処理：洞澤文江
木製品保存処理：久根下三枝子
遺物実測・トレース：(焼物)竹平悦子、(石器・石製品)原田健司、(金属製品)洞澤文江
(木製品)久根下三枝子
遺構図整理・トレース：荒井留美子
挿図版下作成(DTP)：(石器・石製品)原田健司、(その他)竹原 学
写真撮影：(遺構)宮島義和、(遺物)宮嶋洋一
- 5 本書の中で使用した遺構の略称等は以下のとおりである。
竪穴住居跡→住、土坑→土、ピット→P、掘立柱建物跡・礎石建物跡→建、柱穴列→柱列、焼土面(炬跡)→焼
- 6 焼物実測図における断面の塗り分けは以下のとおりである。
白色：土師器・土師質土器、黒色：須恵器・須恵質土器・陶磁器、灰色：瓦質土器
- 7 土師質土器皿のタール状ないしスス状炭化物の付着範囲、および増場の溶滓付着範囲の表現はトーンで示した。
- 8 図中で使用した方位は真北を示す。また地図上における調査区の位置は遺構全体図に国家座標(世界測地系・第8系)を示した。なお、座標値は平成23年3月11日に発生した東北太平洋沖地震以前の値で、地震による変動の補正パラメータは適用していない。
- 9 調査から本書作成までの間、以下の方々から指導・助言・協力を得た。なお、調査指導委員等関係者については第Ⅰ章に記した。
市川恵一、市川隆之、遠藤公洋、鈴木地平、関沢 聡、祐津宗伸、松本建速、望月道彦、横内文人(敬称略)
- 10 本調査における出土遺物および写真・実測図等の記録類は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189)に保管している。

目次

例言

目次

第1章 調査事業の概要

- 第1節 事業の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 第2節 第2次調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
- 第3節 調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第II章 遺跡の環境と周辺の考古学的調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第III章 第2次調査の成果

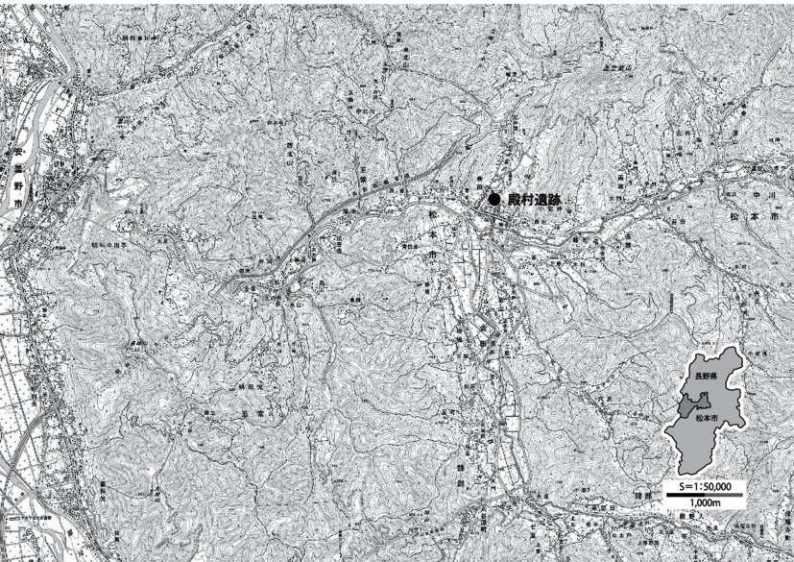
- 第1節 調査の目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
- 第2節 遺構
 - 1 2A1 トレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
 - 2 2C1 トレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
- 第3節 遺物
 - 1 焼物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
 - 2 石器・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
 - 3 土製品・金属製品・鍛冶関係資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
 - 4 木製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

第IV章 調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

写真図版

報告書抄録

第1図 殿村遺跡の位置



第1章 調査事業の概要

第1節 事業の経緯

殿村遺跡は松本市大字会田字殿村に所在する縄紋時代～中世の遺跡である。平成20年、この地に四賀地区統合小学校（四賀小学校）の建設が計画され、松本市教育委員会文化財課は同年9月から記録保存を目的とした発掘調査を実施した。当初3カ月の予定で開始した調査は、石積を伴う大規模な中世の造成遺構と数回にわたる改修により重層する遺構面を検出することとなり、作業は非常に難渋し予定期間での終了が困難となった。そのため、学校建設主体者である学校教育課との協議により再三にわたって調査期間の延長を図り、最終的に翌平成21年度まで延長することとなった。この間、保存状況が良好で全国的にもまだ発見事例の少ない15世紀代の石積の発見に、市民や市議会、学界から注目が集まり、次第に保存の要望が寄せられるようになった。平成21年7月には地元四賀地区町会連合会から「殿村遺跡保存及び四賀小学校早期建設に関する要望書」が提出され、これを受けて松本市は遺跡の全面保存と学校建設予定地の移転を決定した。この時点で発掘調査は保存を前提とした調査に目的を切り替え、平成22年1月までに保護砂による埋め戻し等の十分な保護措置を施して終了した。以上が第1次調査の経過である。

保存決定の後、文化財課は文化庁記念物課および長野県教育委員会文化財・生涯学習課に殿村遺跡の今後の調査方針について助言を求めた。その結果、中世考古学を中心に関連する各分野の専門家による調査指導委員会を立ち上げ、平成22年度以降当面の間、現状では不鮮明な遺跡の性格を明らかにするための範囲内容確認調査を継続的に実施していくこととなった。

殿村遺跡調査指導委員会は委員6名で組織し、平成22年4月の第1回会議でこれまでの経過と第1次調査の概要を報告した後、今後の発掘調査計画を提示した。会議の席上、笹本正治委員長をはじめ各委員からは、殿村遺跡を取り巻く歴史的景観、とりわけ虚空蔵山を中心にその山麓一帯に広がる宗教的空間の存在が注目され、殿村遺跡についてもその中に位置する宗教的な施設のひとつである可能性を強く示唆された。その上で、今後の調査については、殿村遺跡の発掘調査に加え、かかる宗教的空間を対象とした考古・歴史・民俗・自然等多分野にわたる総合的な調査を実施していくことが望ましく、その中で遺跡の位置付けなされるべきとの助言を得た。

松本市教育委員会はこの助言に沿い、「殿村遺跡調査事業」として総合調査の実施を計画し、殿村遺跡の発掘調査をその基軸に据えることとした。総合調査は、遺跡（点）から地域・背景（面）へと視点を拡大させ、「殿村遺跡とは？」「会田御厨と会田氏」「殿村遺跡の前章～原始・古代の会田盆地」「虚空蔵山を中心とする信仰世界の形成」「道と宿場と集落が織りなす景観」「水と緑が織りなす虚空蔵山麓の景観」「松本市の中での殿村遺跡」を主要テーマとして掲げ、発掘調査、景観調査、社寺・信仰資料調査、城館跡調査、民俗調査等を計画的に実施していこうとするものである。

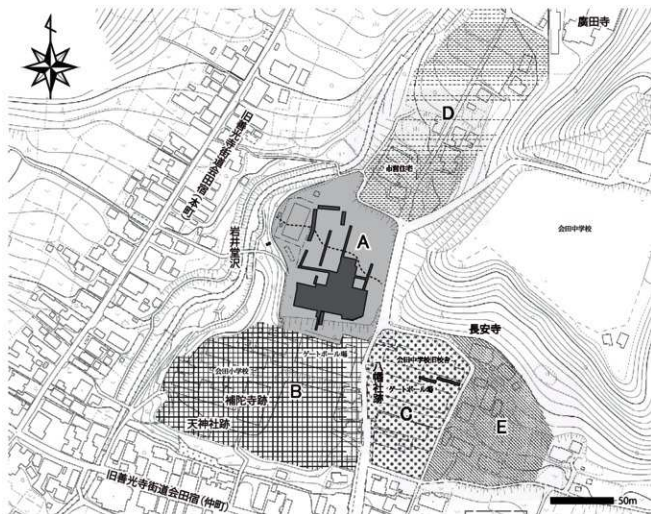
この調査事業の基軸となる殿村遺跡の発掘調査については、学校建設に伴う記録保存を目的とした1次調査では追求できなかった遺跡の全体像の把握を目的に、特に①中世を中心とする遺構・遺物の広がりや保存状況の確認、②1次調査で検出された石積を伴う造成遺構の広がりや全体構造の把握、③遺構群の時間的・空間的位置付けと性格の解明に主眼を置いて調査を進めることとなった。

次に発掘調査の実施地点については、現状で遺跡の範囲と想定される南北約400m・東西約300mに及ぶ空間をAゾーンからEゾーンまで5つの区域に分割し（第2図）、年度毎に第1次調査区のあるAゾーンの調査とその他のゾーンの調査を組み合わせることで実施していくこととした。また、これらの区域のうち、現在

会田小学校が置かれているBゾーンについては平成25年度の学校移転以後に着手するなど、各ゾーンの实情に合わせた年次計画を立てた。各次調査の報告書は原則として次年度に刊行し、最終年度に第1次調査の成果を含めた総括編を刊行することを目標とした(第1表)。

第1表 調査計画

ゾーン	予想される検出遺構等	土地利用状況		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
				2次	3次	4次	5次	6次	7次	8次	
A	中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	空地	市有地	1次調査区周辺							
B	旧補陀寺関連遺構(中・近世) 旧天神社関連遺構(近世) 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	学校 住宅 GB場	市有地、 一部民有地					校庭・校舎			
C	長安寺関連遺構(中・近世) 八幡社関連遺構(近世) 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	旧校舎 GB場	市有地	旧校舎周 辺		旧校舎周 辺					
D	廣田寺関連遺構 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	畑地 宅地	民有地 一部市有地						休耕田 荒地		
E	長安寺関連遺構(中・近世) 縄紋・古代～中世遺構面	畑地 宅地	民有地						畑地		
調査報告書刊行				1次 概報	2次 報告	3次 報告	4次 報告	5次 報告	6次 報告	7次 報告	1・8次報告 (総括編)



第2図 ゾーニング

第2節 第2次調査の経過

今回報告する第2次調査は、前節で述べた調査計画に基づいて平成22年度国庫補助事業として実施したものである。調査箇所はAゾーン1カ所（2A1トレンチ）、Cゾーン1カ所（2C1トレンチ）を選定し、平成22年8月19日に着手、同年12月13日に終了した。また、報告書の作成は本年度、平成23年度国庫補助事業として作業を進めた。

調査から報告書刊行までの一連の事務および作業の経過は以下に示すとおりである。

<平成21年>

11月19日 平成22年度補助事業計画書提出

<平成22年>

2月17日 平成22年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

4月1日 平成22年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知

4月23日 平成22年度第1回調査指導委員会開催（四賀支所）

8月18日 殿村遺跡第2次調査開始、準備作業にかかる

8月20日 2C1トレンチの調査に着手

9月27日 2C1トレンチの埋め戻し完了

9月29日 2A1トレンチの調査に着手

11月15日 平成23年度補助事業計画書提出

11月27・28日 平成22年度第2回調査指導委員会開催（殿村遺跡ほか）

12月2日 2A1トレンチの埋め戻し完了

12月13日 現場における作業をすべて終了

殿村遺跡埋蔵文化財発見届および保管証、発掘調査終了報告書提出

<平成23年>

2月10日 平成23年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

3月19日 平成22年度調査報告会・講演会開催（四賀支所）

4月1日 平成23年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知

10月22・23日 平成23年度調査指導委員会開催（殿村遺跡ほか）

第3節 調査体制

<平成22年度>

調査団長 伊藤 光（松本市教育長）

調査担当 竹原 学（主査）、宮島義和（嘱託）

報告書担当 竹原 学、宮島義和、原田健司（嘱託）

調査員 熊谷康治、宮嶋洋一

発掘協力者

大滝清次、長岩千晴、成沢 輝、召田和男、召田尚武、矢満田伸子

整理協力者

荒井留美子、柏原佳子、久根下三枝子、佐々木正子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、前沢里江、三澤栄子、村山牧枝、八坂千佳

事務局

松本市教育委員会文化財課

塩原明彦（課長）、大竹永明（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、柳沢希歩（嘱託）

殿村遺跡調査指導委員会

委員長 笹本正治（信州大学副学長）

委員 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）

中井 均（長浜城歴史博物館長）

中澤克昭（長野工業高等専門学校准教授）

水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課主任）

指導・助言 寺内隆夫（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

<平成23年度>

調査団長 吉江 厚（松本市教育長）

調査担当 竹原 学（主査）、宮島義和（嘱託）

報告書担当 竹原 学、宮島義和、原田健司（嘱託）

発掘協力者

塩原政夫、塩原正幸、長岩千晴、福原正子、待井正和、召田尚武、矢満田伸子

整理協力者

荒井留美子、内田和子、柏原佳子、草間恵美、久根下三枝子、佐々木正子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、
奥 理恵、中澤温子、洞沢文江、村山牧枝、安田津由紀

事務局

松本市教育委員会文化財課

塩原明彦（課長）、大竹永明（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、柳沢希歩（嘱託）

殿村遺跡調査指導委員会

委員長 笹本正治（信州大学副学長）

委員 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）

中井 均（滋賀県立大学准教授）

中澤克昭（長野工業高等専門学校准教授）

水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長）

指導・助言 寺内隆夫（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

第Ⅱ章 遺跡の環境と周辺の考古学的調査

松本市の北東部、会田盆地は嶺間とも呼ばれるように、四方を標高600m～1,600m前後の低い山々に囲まれた小盆地の体をなす。この地域の基盤は別所層、青木層等の第三紀層からなり、保福寺川や会田川による長年の浸食を受け狭隘な盆地が形成されている。会田盆地と筑北との境界をなす北部の峰々は、浸食の影響を受け難い安山岩等の貫入が基盤となり形成される。そのひとつ、標高1,139mの独立峰である虚空蔵山は会田富士とも称され、美しくも険しい山容や湧水の存在から古来信仰の対象となってきた。今日では初期の信仰の実態はほとんどわからないが、古代・中世に開山が遡る寺院が山麓に集中している点にその名残が窺える。また、盆地北部の峰々には東山道の支道や後の善光寺街道等、古くから北信濃、越後方面へ通じる道が通過していた。こうした古道沿いには多数の石造物が分布し、五輪塔や宝篋印塔、宝塔等中世に遡るものも多い。信仰の拠点と交通の要衝という地域的特性を背景に、古代・中世には会田御厨が置かれ、東信濃の滋野氏の一党である会田氏（海野氏・岩下氏）が地頭としてこの地の経営にあたった。戦国時代、とりわけ武田氏の信濃侵攻やその後の小笠原氏による支配回復など、一連の軍事的緊張の高まりの中、この地域にも多くの山城が築かれた。虚空蔵山城をはじめとする城跡が盆地を取り囲むように分布している。

殿村遺跡は虚空蔵山西麓から南流する岩井堂沢の左岸の緩斜面、会田川に臨む断崖上にある。この沢は第三紀層の浸食に伴う多量の土砂を下流にもたらし、遺跡の基盤層を形成している。その中には虚空蔵山の骨格をなす輝石安山岩の礫が多量に含まれ、中世において礎石や石積等の構築材に供された。

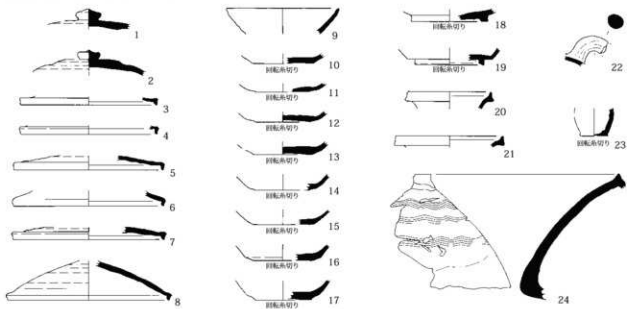
このように、会田盆地は歴史的に重要な地域であるにも関わらず、考古学的な調査は遅れている。しかし過去のわずかな発掘調査資料や個人収集資料を垣間見る限り、上述のような自然的・歴史的特質を色濃く反映した特徴的な遺跡・遺物の傾向を見て取ることができ、今後これらを再整理していく必要がある。そこで、本報告では最近収集し整理作業を終了した既出資料の中から、須恵器生産に関わるものについて提示する。

これまで、松本平南部の須恵器生産は岡田地区の芥子望主山一帯から安曇野市東部を経て会田盆地に至る筑摩山地にその主体があり、窯跡が濃密に分布することが知られている。この地域において生産の比重が高まった第一の要因は、第三紀層の風化に起因する良質な粘土が豊富に得られる地域的特質に他ならない。現在知られている窯跡の中で、とりわけ複数の支群からなる芥子望主山周辺と会田盆地周辺の窯跡群の規模が大きい。これまでの窯跡や集落遺跡の調査・研究成果からこの地域における須恵器生産は7世紀後半まで遡り、8世紀代に本格化、9世紀中葉には食器類の生産が終焉を迎えることが判明している。

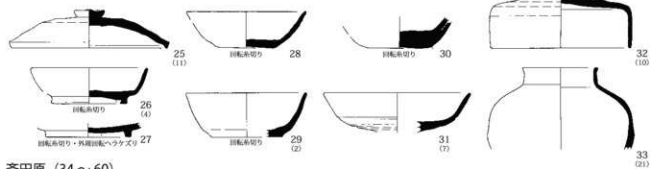
会田盆地の窯跡群は、盆地西部の反町から板場、齋田原にかけての丘陵地帯を中心に、会田川流域と保福寺川流域に窯跡の分布が知られている。過去に発掘調査が行われたものにムジナカワ窯跡、板場窯跡等があるものの、多くは表面採集による乏しい資料であり、個々の窯跡群の実態は不明である。

ここで第3・4図に示した資料は、いずれも表面採集によるものである。そのうち鷹巣根城山東窯跡採集資料は、平成23年に森林伐採に伴う作業道開削により発見したものである。遺構は刈谷原トンネル東出口の北脇にあり、掘削により灰原とみられる炭灰層や溝状遺構が露出した。周辺にはなおいくつかの窯跡が存在するものと推定される。器種は杯A・B、杯蓋B、壺類、甕、突帯付四耳壺が見られる。いずれも小片であるが、杯類の形態や法量、成形・調整技法等の特徴から8世紀末～9世紀初頭に位置付けられる。板場沢屋・齋田原採集資料は、かつて開墾や農道開削工事に際して地元在住の久保諒治氏が収集したものである。長く四賀化石館で保管されてきたもので、図化可能なものを抽出して示した。これらは『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻 歴史上』（以下部誌と略す）に齋田原古窯址群出土遺物として紹介されたものの一部であることも判明したが、25～33は「板場沢屋」と記された紙箱に収納されており、ここではその標記に従っ

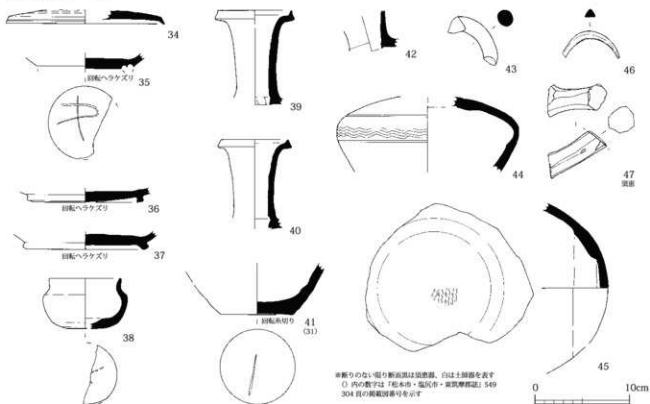
鷹巣根城山東窯跡 (1 ~ 24)



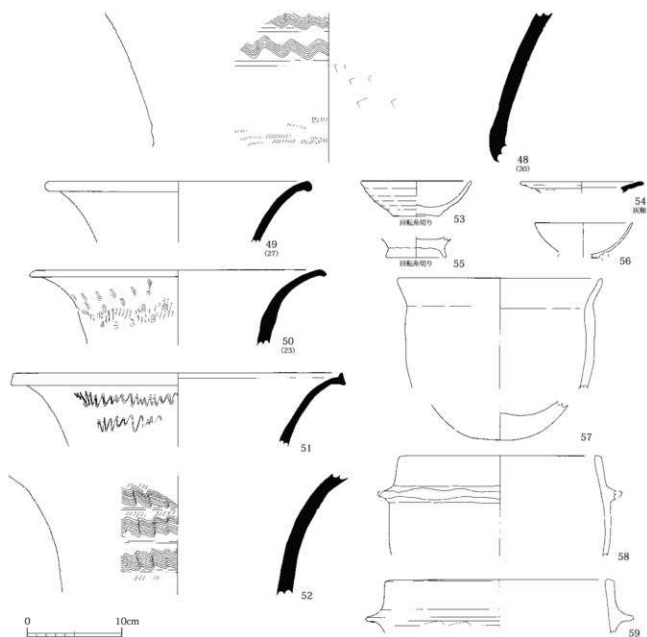
板場沢屋 (25 ~ 33)



斎田原 (34 ~ 60)



第3図 既出資料 (1)



第4図 既出資料 (2)

ている。器種は杯A・B、杯蓋B、高杯、壺蓋、短頸壺が見られ、杯類はいずれも回転系切り痕を残す。鷹巣根城山東窯跡出土品に比較して27・29等にやや古い様相が認められ、全体としては8世紀後半～9世紀初頭の年代観が与えられる。ただし明らかに時期が遡る高杯(31)が存在すること等、時期にばらつきがある。一方、齋田原採集資料は窯跡出土資料と、おそらく住居跡から出土したであろう資料からなる。いずれも地点の細かな記載がないが、窯跡出土資料は杯B、杯蓋B、長頸壺、甕類の形態と施紋に古い様相が窺え、8世紀前半あるいは7世紀代まで遡り得るものを多数含んでいる。松本平南部の窯跡群としては最も古い段階の資料のひとつと言える。住居跡出土資料と考えられる一群は、土師器杯A・椀・甕・羽釜、灰釉陶器段皿が見られる。消費地編年の11期(10世紀末)頃に位置付き、時期的にもまとまっている。

<参考文献>

- 四賀村誌編纂会 1978 『四賀村誌』
- 東筑摩部・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩部・松本市・塩尻市誌 第二巻 歴史上』
- (財)長野県埋蔵文化財センターほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編』
- 長野県考古学会 1997 『長野県考古学会誌81 特集松本平における古代の窯業生産—既出資料の再検討—』
- 豊科町東山道跡調査会ほか 1999 『筑摩東山 上ノ山・葛蒲平窯跡群発掘調査報告』



第5図 周辺の遺跡と文化財

- 遺跡
- 中世の遺跡
- ★ 指定文化財
- その他の文化財

0 500m

松

第三章 第2次調査の成果

第1節 調査の目的と方法

調査地の選定とトレンチの配置（第6～10図）第1章でも触れたように、本調査は殿村遺跡の性格を明らかにするために実施したものである。今回は1次調査で十分追求できなかった平場遺構周縁部の状況把握と、Aゾーン以外の区域における中世の造成跡や遺構の状況確認をすべく、2地点を選定して調査した。2A1トレンチは、Fトレンチで存在を確認したものの十分追求ができなかった土塁の状況を確認するため、Fトレンチに東接して設けた。2C1トレンチはCゾーンの北寄り、旧会田中学校校舎（北校舎）とゲートボール場A棟の間にある砂利敷駐車場に設定し、2C1aトレンチと2C1bトレンチの2本構成とした。

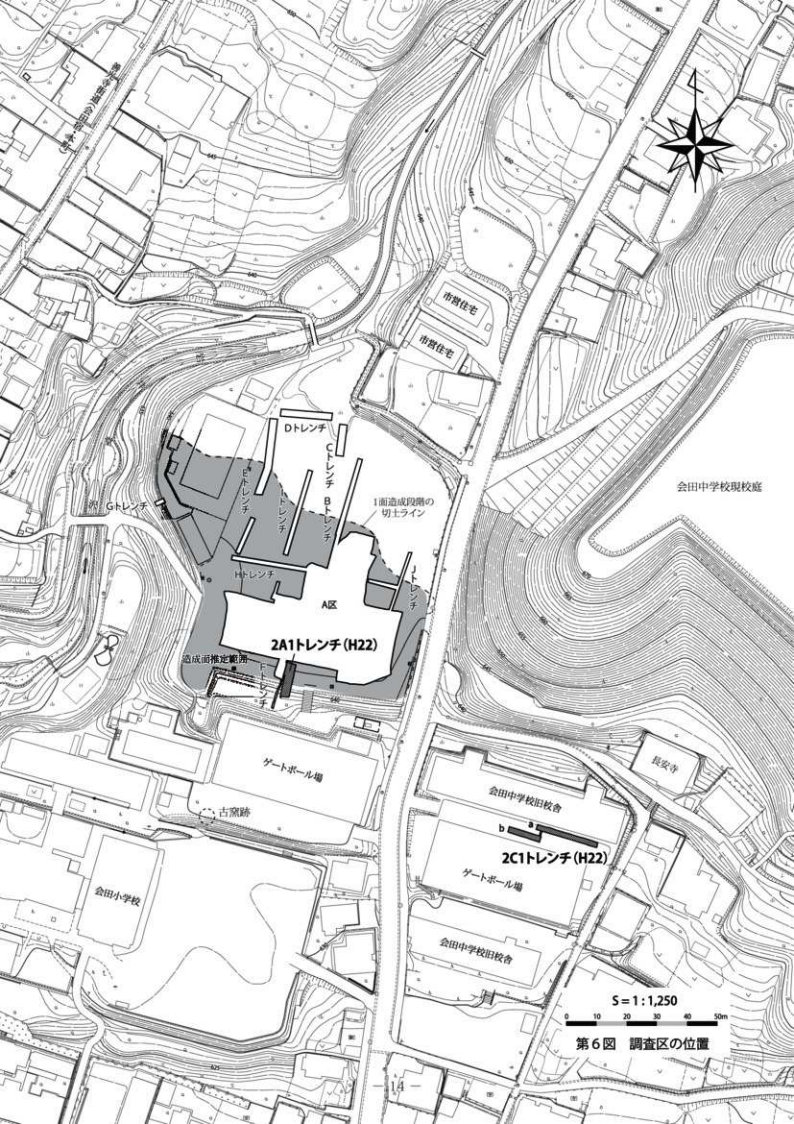
調査手順 2A1トレンチは、あらかじめフェンスとサクラの除却を行った後、重機でグラウンド造成に関わる盛土層を除去し、昭和28年当時の地表面を検出した。以後人力作業にて層別的な調査を進めた。最終的に土塁と土塁築造当初の地面（3～5面段階）を確認するため、上位の1～2面に伴う遺構は記録保存とした。土塁は保存のため表面の検出にとどめ、断ち割りトレンチ1本ののみ掘削した。2C1aトレンチは最初に重機で碎石の除去を行ったところ、ほぼ直下で中世の整地土層が露出した。しかし、旧会田中学校やゲートボール場建設時の攪乱が激しかったため、検出面は整地土層中に設定せざるを得なかった。検出面以下はサブトレンチにより地山面までの土層観察を実施した。2C1bトレンチも整地土層上部は攪乱が著しかったが、2層目の遺構検出面が存在したためそこから調査を開始した。保存を図るため遺構は部分的な調査にとどめ、整地土層と地山の確認は3カ所のサブトレンチで行った。調査終了後は遺構面の保護を図るため、1次調査と同様に土シートを張り、トレンチ内を保護砂で満たした後に掘削土で埋め戻しを行った。

調査面・遺構名・番号管理 2A1トレンチは1次調査で設定した遺構面（1～5面）を踏襲したが、2C1トレンチでは1次調査との対応関係が直接追えないため仮の名称を充てた。遺構番号は1次調査との重複を避けるため後続する区切りのいい番号からスタートし、1次調査時の方針に従って遺構の内容が判明した時点で種別を頭に冠した。石積や石列等特定の遺構も1次調査からの連番とした。

測量記録 遺構測量は、2A1トレンチは1次調査で設定した国家座標に基づくグリッドを基準として記録を実施した。2C1トレンチは便宜上トレンチ内に任意の基準線を立てて記録を行い、後でトレンチ両端に設けた基準点の国家座標値を観測した。標高は平成22年度に新設した道路上の基準点から導いた。

第2表 調査成果一覧

調査期間	平成22年8月18日～12月13日	調査面積	75.3㎡ (2A1トレンチ31.5㎡・2C1トレンチ43.8㎡)
検出遺構		出土遺物	
< 2A1 トレンチ >			
不明遺構	1基 (古代または中世)	縄紋時代	石器
石積	2基 (中世)	奈良・平安	焼物：土師器・須恵器
集石	1基 //	中世	焼物：土師質土器 (皿・内耳鍋)
溝状遺構	1基 //	(12～16c)	瓦質土器 (播鉢)、柘器 (珠洲甕・常滑甕)
焼土面	1基 //		東海系無釉陶器 (控鉢)
ピット	10基 //		古瀬戸・大京系陶器 (天目茶碗・小碗・丸碗・折縁深皿・播鉢形小鉢・四耳壺)
土塁	1基 //		中国産磁器 (青磁碗・白磁四耳壺・染付皿)
テラス状遺構	3基 //		
整地土層	//		石製品：硯・石鉢・石臼
< 2C1 トレンチ >			
石列	1基 (中世)	木製品：下駄・曲物底板・著丈木製品・短冊状板・板・端材・削屑	
溝状遺構	1基 //	金属製品：釘・銅銭	
ピット	6基 (古代・中世)	鍛冶関係資料：増場・羽口・滓	
整地土層	(中世)	土製品：土製円板・焼粘土塊	
		自然遺物：炭化材・種実等	



第6図 調査区の位置



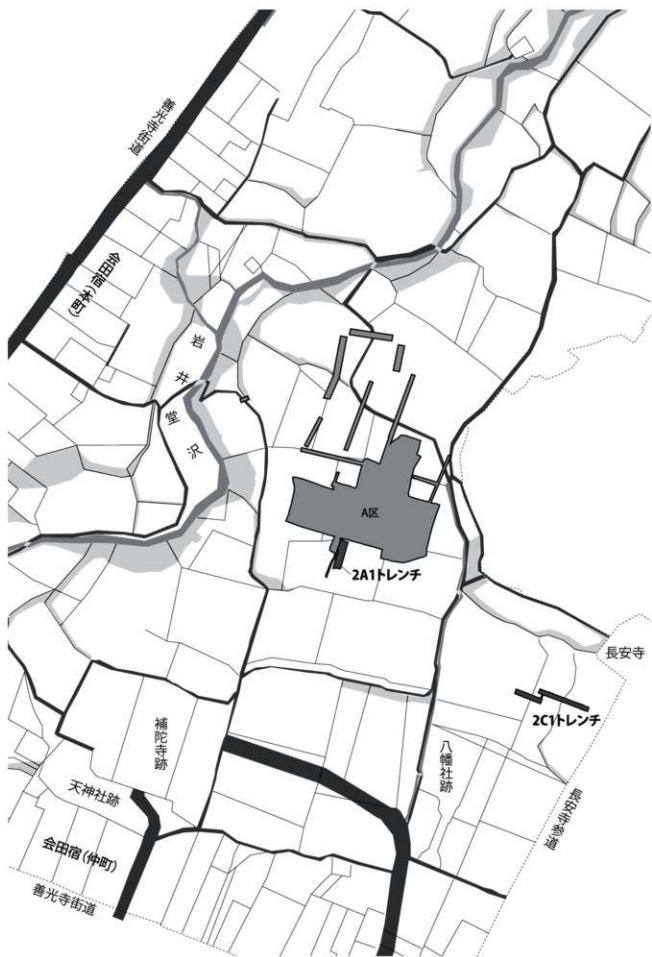
第7図 Aゾーン調査区全体図（5～3面）



第8図 Aゾーン調査区全体図 (2面)



第9図 Aゾーン調査区全体図(1面)



第 10 図 調査区と周辺の地割 (明治 24 年)

第2節 遺構

1 2A1トレンチ (第11～13図)

(1) 概要

本トレンチは1次調査Fトレンチの東に接し、南北長11.9m・東西幅3.3m(いずれもグラウンド盛土を除いた旧地表面での規模)に設定したものである。地形の現況は盛土によるグラウンドの平坦面からフェンスを介して急な斜面となっている。前節でも触れたように、調査は最初に重機でグラウンド盛土を除去し、昭和28年までの旧地表面を露出させる作業から開始した。その結果、1次調査A区ではほぼ平坦だった旧地表面が、A区南端付近から徐々に下降を始め、緩斜面となってトレンチ南端に達する状況が捉えられた。旧地表面の耕作土は概して薄く10～20cmの厚さを有するのみだが、トレンチ中央付近では畑やグラウンドの造成に関わる削土や井戸等の攪乱が厚く、後述する平場南辺や土塁頂部を破壊している。

トレンチ内の整地土や遺構は、中央付近で検出された土塁を境に、北半において1次調査で検出された石積Aの前に広がる空間とその埋め立てにより形成された平場(1・2面)、南半において4面段階以降土塁南側に設けられたテラスの埋め立てが進行していく状況が捉えられ、これらの営みによる人為的な盛土は南部で2.1m、北部で95cmにも達し、複雑な堆積状況を呈していた。また、1・2面の平場上からは1次調査範囲から続く掘立柱建物址や土坑等の遺構が検出され、それらが平場の末端近くまで分布している状況が確認された。

(2) 5面の遺構 (第13図)

4面段階に始まる土塁や平場構築に伴う厚い盛土層を除去した最下面は、岩井堂沢の堆積物であるシルト層が広がる。このシルト層は非常に堅く締まり、概して含有する鉄分の酸化により黄褐色を呈している。この層中には大小の輝石安山岩礫が含まれ、大きいものでは1m以上に達するものも見られる。最上部には20～50cm程の厚さで土壌化した黒色土層が形成され、遺構・遺物の状況から縄紋時代から中世前半期(14世紀代まで)に至るまでの地表面が時間をかけて遷移していった結果形成された土層と考えられた。2A1トレンチにおいても、土塁盛土下～土塁南空間で確認され、奈良時代末～平安時代前期の土師器・須恵器片が得られた。また、トレンチ北半の東壁下では地山を掘り込む遺構が1基検出された。

(3) 3・4面に伴う遺構 (第11・13図)

1次調査で検出された石積A・Bに画される平場(3・4面)に伴う遺構として、石積前空間を構成する通路状遺構、土塁(石積C・D)、土塁南空間を構成するテラス1が検出された。

ア 通路状遺構

石積Aと土塁の間には、両遺構の壁間の距離にして7.3mの空間がある。その底面は石積A側においては基盤整地土を掘り込み、土塁側は地山の黄褐色シルトを削り込んでいる。中央付近でのレベルは石積A下端より64cm、土塁法尻より16cm低い。なお、1次調査A区の南壁は、本遺構のほぼ中央を縦断している。その所見によれば、遺構の底面はA区東寄りに存する石積B3からBトレンチ付近まで下降した後、今回調査地点を経て西に上昇し、石積A西端よりやや西側で平場上面に達して終息する状況が看取された。

このような状況から、本址は石積Aあるいは石積Bをもって南面を画される平場の前面を東西に連絡する通路的な空間とひとまず捉えておきたい。その後、本址は2面の造成により埋め立てられ、整地土下に埋没した。その過程については1次調査では必ずしも十分な所見が得られなかったが、今回、南北方向の土層観察を行ったことにより、次のような所見を得ることができた。

- ① 4面段階において石積Aの南に土塁が置かれ、その間を通路的な空間とする。
- ② 3面段階（石積A・B3段階）に本来の役割を終え、土塁側と石積A側から埋没が進む。
- ③ 2面造成の段階に至って短期間にうちに埋め立てられる。

このうち、②段階の堆積物は、多量の木製遺物を含む暗褐色の堆積土と、土塁側から徐々に流入したと考えられるきめの細かいシルトや粘土からなり、トレンチ北端で両者が交互に重なりながら境界をなしていた。土塁側からの堆積物は明らかに廃棄によるものと考えられる。また木製遺物が多数残存し、土塁側からの堆積物が穏やかな水中での堆積状況を示すことから、この空間は埋没過程において冠水していた時期があったものと推定される。

通路状遺構底面からの出土遺物は硯1点を除きほとんどないが、上述の廃棄層からは多量の木製遺物が得られている。その内容は非常に特徴的で、建築材等の削り屑や端材に加え、祭祀具と考えられる箸状木製品がその大半を占め、食器等その他の生活用具ごくわずかである。そのうえ廃棄された遺物そのものがほぼ木製品に限られ、焼物やその他の製品がほとんど見当たらない。埋没過程におけるこの空間の性格を暗示していると捉えられる。

イ 土塁

1次調査で存在が確認され、今回構造が明らかになった遺構である。5面直上に築造され、南法尻は石積Dで画する。北法面は上部に石積Cを配している。北法尻から石積D下端までの基底幅は5.0m、北法尻からの現存高1.1m、石積D基底面からの現存高1.8mを図る。頂部は相対する石積Aとほぼ同じか若干低いが、グラウンド造成直前の地表土直下にあるため若干後世の削平を受けている。そのため頂部に何らかの移設があったかどうかは確認できない。また、南法面は2面段階以降の改修によって大きく抉るように削り取られ、石積Dは上部を失っている。土塁の走向はN-81°-Wを指し、石積Aとほぼ平行に築かれている。

盛土は芯となる中央部に黒色シルトを版築状に叩き締めながらマウンド状に積み上げ、上部は黄褐色シルト塊を多量に混ぜた非常に硬い層となる。また最上面は暗褐色シルトを貼り、これを表面化粧土としている。この芯土と交互に、北法面ではより緻密な灰色シルトを貼っている。一方、南法面は削平により状況がわからないが、最下層では石積Dの裏込として暗黄褐色シルトを貼っている。このシルト層は芯土に先行していることから、土塁の構築は傾斜下方の南側から石積Dの構築とともに開始されたことが読み取れる。この付近では5面が段差をなしており、石積構築にあたって一旦地面を掘り込んだことがわかる。

土塁盛土層中からは古瀬戸、白磁四耳壺等、若干の焼物片が得られている。

ウ 石積C

土塁北法面上部に構築され安山岩の垂角礫を2段に配した遺構である。石材は幅25～65cm・奥行30cm以上・高さ20cm程のものを未加工で用い、土塁の傾斜に沿って上段は15cm程後退させる。礫間は土塁盛土の暗褐色シルトを練り込む。1次調査Fトレンチでは下段のみ残存していた。

エ 石積D

長さ20～40cmで未加工の角礫・垂角礫を乱積みしたと考えられるが、後の削平で大半を失い根石を残すのみである。従って本来の高さはわからない。石積の基底線は直線をなすが、西壁下では鍵の手に南に拡張され、この部分での土塁基底幅は6m程となる。さらに、西壁下の根石から1.3m土塁側にも築石と考えられる礫が存している。1次調査では確認ができなかったが、Fトレンチ側にかけて何らかの施設が設けられ、改修が重ねられたのかもしれない。前述のように、石積Dの構築は土塁の盛土に先行して始まり、土塁構築と併行して進められたと推測される。なお、裏込土には栗石様の拳大前後の角礫が多数含まれていた。

オ テラス1

石積Dから南側、トレンチ南端までの間は、5面の黒色土層中に若干南に傾斜しつつも平坦に近い面が

形成されていた。トレンチから南側では緩斜面を経てゲートボール場側に落ち込んでいく様子が1次調査Fトレンチで確認されている。

(4) 2面の平場と遺構 (第11・13図)

ア 平場と整地土

トレンチ北部からは、1次調査A区から続く2面の平場南縁部が検出された。本来、遺構面は土塁頂部まで広がり土塁南法面を切岸としていたと推測されるが、後の削平により失われていた。平場の造成にあたっては、前段階の石積前空間を比較的短期間のうちに埋め立てたと考えられる。しかし、その中途においては集石2や石列13(1次Fトレンチ)が構築され、一時的に何らかの建築行為が行われていたようである。

土層観察の結果から、前述の通路状遺構を覆う堆積土の形成の後、2面形成に至るまでの埋め立ての過程は以下のように復元される。

①通路状空間を覆う堆積土は土塁側からの廃棄が卓越するため、北半でスロープ状、南半では平坦面となっている。

②石積A側から暗褐色土を主体とする整地土で埋め立てが開始される(1次整地土)。

③まだ平坦面を残す土塁側に石列13、集石2が設けられる。

④北側から埋め立てが再開されるが、この段階は岩盤の掘削により得たと考えられる黄褐色の風化泥岩屑を用土として用い、土塁側まではほぼ水平に埋められる(2次整地土)。

⑤化粧土として目の細かい黄褐色シルトを2、3層重ね、面を設ける。表面は非常に硬く叩き締める(3次整地土)。

なお、2面は北半部において2層構造となる。調査段階で下層を当初面、上層を最終面として捉えた。前者は1次調査で2'面としたものにほぼ相当する。当初面は南半部、土1429周辺では薄い炭層が覆う硬化面となり明瞭だが北部では判然としなくなる。

イ 集石2

平場造成過程③の段階で構築された遺構で、石列13に東接し一体となるものである。南北2.8m・東西2.4mの範囲に10～40cm程の大きさの礫が集積され、西に面を描いた石列の背面側に広がっている。何らかの建築物の基礎である可能性が高い。また遺構の構築面は他の整地面と異なり、長期間使用された生活面とはとても言い難い状況である。これらの遺構の上には間層を置いて厚く炭層が広がるが、これも埋め立て過程で廃棄されたものと捉えられる。

ウ 土坑

土1429は平場上で検出された遺構の中で最も大型のものである。直径1.7mの浅い皿状の遺構で、底面は周辺の遺構面と同様、非常に硬く叩き締められる。当初面で構築され、全体に貼土されるが最終面まで継続する遺構である。東寄り縁辺部にP1426・1428があり、本址に付属すると考えられる。

エ その他の遺構

トレンチ北西部から浅いピット(P1425)と溝状遺構(P1427)各1基が検出された。後者は不明瞭な掘り込みで、意図的に設けられたものではないかもしれない。

オ 遺物出土状況

平場上からは若干の焼物片のほか、土1429から銭、やや離れて鉄製品が出土した。整地土層中の遺物は1次整地土層中から土師質土器皿、古瀬戸、青磁等の焼物片、銭1点に加え埴埴、羽口片が出土するが、一括性のある遺物は見られない。また、風化岩屑を主体とする2次整地土は遺物をまったく含まず、3次整地土からの出土もほとんどない。

(5) 1面および1'面の平場と遺構(第12・13図)

ア 平場と整地土

1面は2面上に厚く暗褐色ないし灰褐色のシルトを盛土して平場を造成する。その範囲は2面と同様、旧土壘天端までの範囲と考えられるが、南部は削平により本来の高さを失っている。2面と同様、新旧2面がある。当初の築造面(1'面)は2面から15～30cmの高さにあり、2面のほぼ直上から整地土中層にかけて多量の礫が廃棄されていた(礫群)。遺構面は炭や焼土粒が散り、北寄りではピット2基が検出された。最終面(1面)は当初面に炭塊や焼土粒を含む暗褐色土を10cm程貼り、表面は堅い平坦面をなす。総じて、1面の整地土は2面のそれと異なり、色調が暗色で炭化物等の有機物を多く含む等傾向が著しく異なる。2面が主に地山(岩盤)の削割で得た用土を使用するのに対し、1面では主に生活域近辺の地表面から用土を得たのであろう。

なお、殿村遺跡における遺構を伴う平場造成は、現状では1面をもって終息すると捉えられている。1次調査では広く1面を覆う黄褐色土層が検出された。遺構がなく生活面の形成を意図したものではないと考えられるが、これも人為的な整地土である。今回、2A1トレンチにおいても狭い範囲であるがこの整地土層が検出された。層厚最大10cm、これまでと同様、遺物や有機物は包含していない。

イ 掘立柱建物址

1面(最終面)においてトレンチ西壁沿いに3基の円形ピット(P1413・1415・1416)が検出された。図面上で検討した結果、1次調査Fトレンチの柱列12と組み合わせり南北2間・東西1間の掘立柱建物を構成することが判明したため、この時点でFトレンチの柱列12を改め、今回検出した遺構を加えて第13号建物址とした。その規模は南北2.66m(柱間1.33m)・東西2.25m、各柱穴の規模は直径30cm内外・深さ25cm内外を測る。今回調査した柱穴はいずれも柱痕が確認でき、特にP1415は柱の一部が炭化して残存していた(図版6)。太さは直径8～10cm程度と捉えられる。

ウ ピット

建物を構成しない、あるいは確認できないピットが最終面で6基、当初面(1'面)で2基検出された。浅い皿状のP1414を除き、いずれも円形柱穴状で、直径15～30cm・深さ5～20cm程度のものである。この内、P1414は深さがあり、柱痕が明瞭に観察できる。

エ 礫群

1'面の整地土、とりわけ中層から2面直上にかけて、10～60cmの礫が集中して出土した。Fトレンチの調査では見出されなかったため、南北3.4m・東西2mの範囲に集中していることになる。しかしながら、その配列に規則性を窺うことは難しい。礫は安山岩を主とする角礫、亜角礫で、被熱したものが多く、加えて少数、被熱赤化し脆くなった平板な砂岩が見られる。こうした1'面整地土中の礫群は、A区の南寄り、Bトレンチの東側でも認められている。礫の状況から、元々石列等の遺構を構成していたものが外され、整地土と共に埋め立てられたのではないかとみられる。

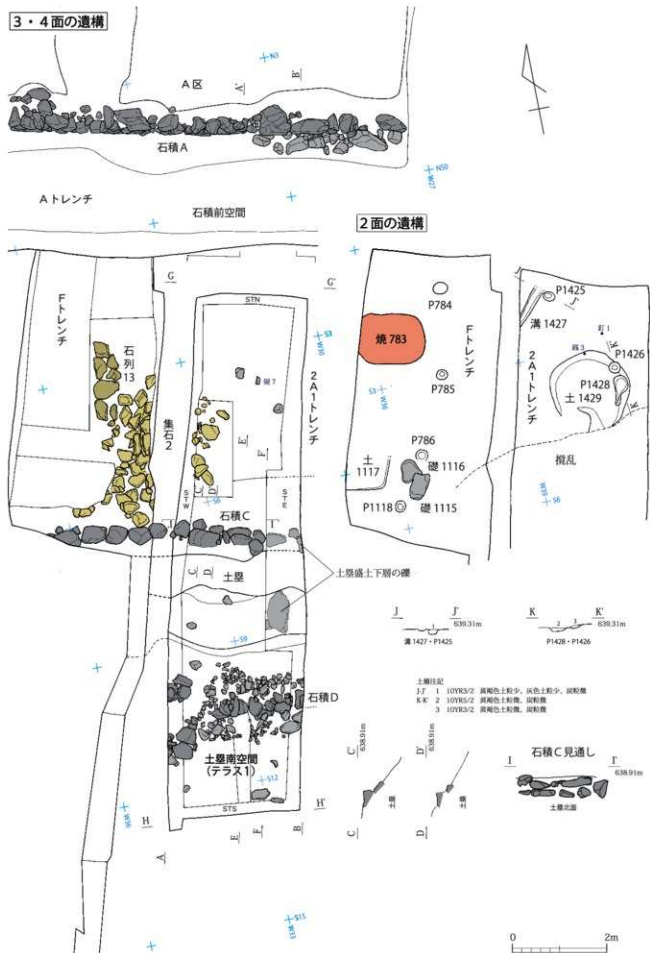
オ 遺物出土状況

検出面上や整地土層中、あるいは遺構内からの遺物の出土は極めて少なく、わずかに焼物の小破片が得られたのみである。その中で、P1414の脇から出土した中国産染付皿の破片が目を引く。

(6) 土壘南空間の遺構(第11～13図)

ア 整地土とテラス

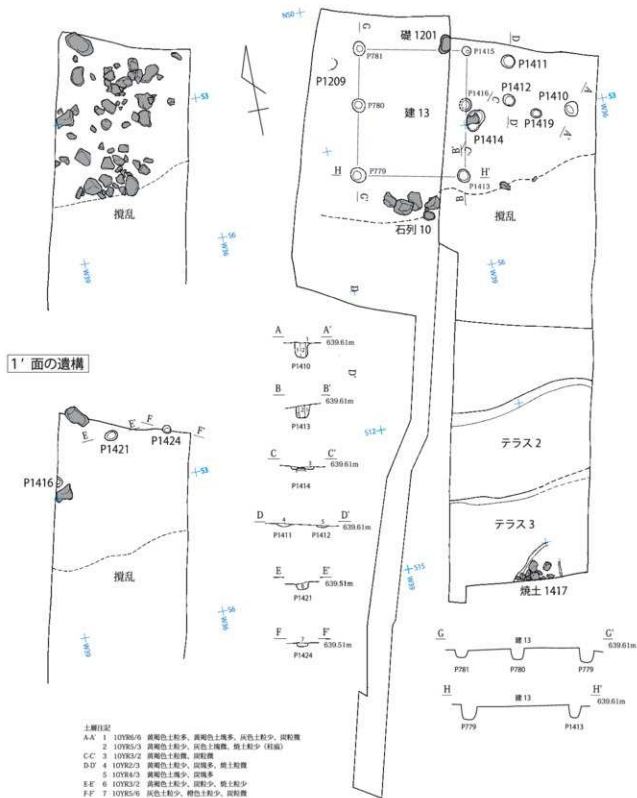
土壘南空間は、4面段階に築造された土壘の南側に広がる空間で、その当初の姿は前述のテラス1である。その後、おそらく石積前空間の埋め立てによる2面段階の平場拡張を契機に、この空間は埋め立てによる整



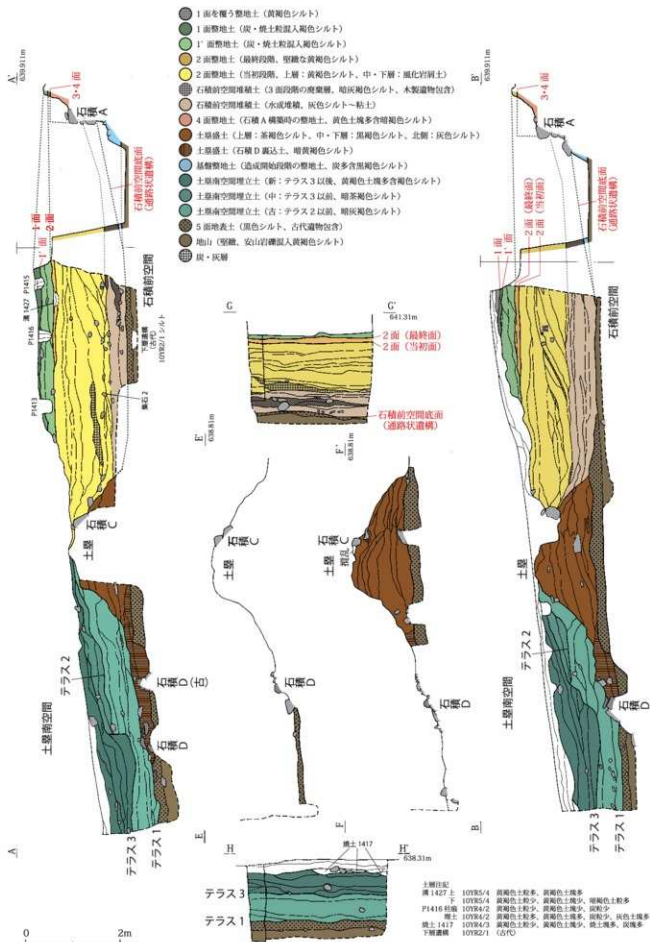
第11図 2A1トレンチおよび周辺の遺構(1)

2 面直上～1' 面整地土中の礫群

1 面およびそれ以降の遺構



第 12 図 2A1 トレンチおよび周辺の遺構 (2)



第13図 2A1 トレンチおよび周辺の遺構 (3)

地と切岸による平場前面の処理とテラスの造成を繰り返して、最終的にはすべて埋め立てられ平場から単純に連続する斜面に姿を変える。土層観察からその過程を復元すると以下のとおりとなる。

- ①土塁南法面を急角度に削り込んで切岸とし、テラス1全体に盛土を施す。切岸前面は緩斜面となる。
 - ②前段階の切岸と前面空間を埋め、やや南に1.5m前後の幅員でテラス2を設ける。
 - ③テラス2を埋め、その南を新たな切岸として前面にテラス3を設ける。テラスは幅2m以上でトレンチ外に延びる。
 - ④テラス3を埋め立てる。調査範囲内では切岸やテラスは見られず、単純な緩斜面となる。
- ①～④の各段階で設けられた切岸・テラスと平場の関係は、土塁周辺での後世の削平が影響し直接掴むことができない。埋立土中からは散発的に焼物片が出土するが、陶器類には大窯製品3点が含まれている。うち1点はテラス2以前の埋立土下層から得られた大窯1段階の製品である。これまでの調査所見では同製品が伴出するのは2面段階以降であり、一連の造成が2面段階以降に開始されたことの証左となる。テラス3を覆う最上層の埋立土については、1次調査Fトレンチでの状況も勘案すれば、あるいは1面廃絶直後の整地層と見ることも可能であり、さらなる検討を要する。

イ 焼土

トレンチ南壁下、テラス3を覆う整地土の上面から焼土塊を多量に含む不整形の土坑1基が検出された(焼土1417)。遺構はさらに南～東壁外に広がっている。出土遺物はなく、時期は特定できない。

ウ 遺物出土状況

前述のように、埋立土層中から遺物の出土を見ている。量的にはここからの出土量が最も多い。その内容は、土師質土器、古瀬戸、大窯、青磁等の焼物に加え、石臼や石鉢等の石製品が見られるが、いずれも特徴的な出土状況を示すものや完形品はない。遺物の取り上げは層位的に行ったが、上下で特に顕著な差を認めることはできない。

2 2C1トレンチ (第14・15図)

(1) 概要

Cゾーンの調査は今回が初めてである。長安寺参道と市道に東西を画されたこの区域は現況では方形3面の難段状地形となっている。近世末まで西寄りに八幡社があり、その周辺は1次調査地点と同様に畑地として利用されていた。明治以後、八幡社は御厨神明宮に移され、また昭和28年からは会田中学校の校地として利用された。この地形の形成がいつまで遡るのか、今回の調査目的のひとつでもあるが、明治24年の地籍図には既に現地地形と整合する地割が見られ、近世以前まで遡るのではないかと予測された(第10図)。

第1節でも触れたように、今回の調査地点はその最上段に設定した。2C1aトレンチは南北幅1.5m・東西長16.6mで、東端は長安寺参道から8.1mの位置にある。さらに南に位置を変えて西側に設定した2C1bトレンチは南北幅1.5m・東西長8.9m、全体として敷地東半部を調査したことになる。これらのトレンチからはAゾーンの平場と同様、中世の厚い整地土が検出され、斜面を造成した平場が存することが判明した。また、平場上からは遺構・遺物も検出されており、以下に詳述する。

(2) 古代の地形面と遺構

ア 地形面の状況

今回の調査トレンチでは、検出面のほぼ全域から中世の整地土層が検出されたが、わずかに2C1aトレンチ東端では中世における地山であり、古代の遺物を包含する黒褐色粘質土層が露出する。一方、2C1bトレンチでは中世整地土層直下で古代の包含層が確認された。両者の間には50cmの高低差が認められ、中世

の造成以前の旧地形は傾斜面をなしていたことがわかる。ところで、2C1a トレンチ検出面で捉えた遺物包含層は中世整地土層と一線を画して入れ替わり、地山がここから急激に落ち込む状況が捉えられた。この落ち込みは2C1a トレンチ全域にわたり、底面に水成堆積による砂層やシルト層が形成されることから、古代以降、中世にかけて2C1b トレンチとの間に北西—南東方向の流路あるいは溝が存していたと推測される。

イ 遺構と遺物

古代に属する遺構は2C1a トレンチ東端の古代包含層上で確認した円形ピット (P1406・1408) が確実なものである。前述の流路ないし溝は古代の包含層を切り、整地作業に伴って埋め立てられることから、中世に帰属する遺構と推定される。

遺物は黒色土器碗、須恵器杯・蓋、突帯付四耳壺等、奈良時代末～平安時代前期のものが見られる。

(3) 中世の平場と遺構

ア 平場と整地土

中世の平場は2面存在することが確認された。ひとつは、2C1a トレンチで捉えた整地土層によって形成された面 (A面と仮称) で、残念ながら近現代の攪乱や削平により直上での調査ができなかったものである。もうひとつは2C1b トレンチの全域で確認された遺構面 (B面と仮称) で、両者はちょうどトレンチの間で25cm以上の段差をなしている。

整地土の状況はA・B面ともに下層～中層に暗褐色のシルト、上層に黄褐色土塊を多量に混ざる斑状のシルトが貼られる。前者は時折大礫を混じり、殊に2C1b トレンチにおいて顕著である。後者は平場の表面化粧土として版築状に貼られたもので、非常に堅緻である。

これらの平場とこれまでAゾーンで調査を進めてきた平場の対応関係は、今回、遺物(焼物)の面からはB面とAゾーン1～2面が対応する可能性が高いが、まだ確定できる状況には至っていない。

イ 遺構

A面の遺構には2C1a トレンチ西部で検出された石列21とピット (P1401) がある。いずれも調査面を整地土層中に設けたため上部を失う。石列21はトレンチ北壁に沿って北西—南東方向、延長4.6mにわたって検出され、さらに域外西側に延びている。石材は30～60cmの垂角礫を用い、西半では断続的な配置となる(図中遺構東半の空白部は元々築石が存していたが、トレンチ掘削時に2石を失ってしまった)。

B面、すなわち2C1b トレンチの遺構は溝状遺構1基、礎石1基、ピット3基があり、東半部は攪乱で破壊を受けている。溝1405は2C1b トレンチの中央、石列21と平行に北西—南東方向に走る。幅40～70cm・深さ10cm内外を測り、堆積状況から水路ではなく、A—B面間の段に並走する区画溝的な施設と考えられる。礎石1402は溝1405に接して東側、溝と段の間の狭い空間に存する。長径25cmの平石が水平に配され、掘り方も確認できる。3基のピット (P1403・1404・1409) はトレンチ西端の狭い範囲に集中する。P1403・1404は溝1405の西に並列する。P1409は溝構築以前の遺構である。いずれも柱穴と捉えられ、P1404は柱痕が認められる。

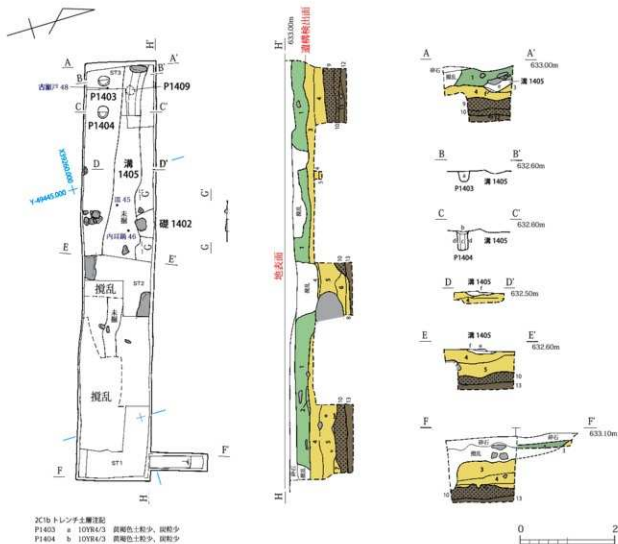
ウ 遺物出土状況

平場上の遺物は、B面において溝1405の内外から土師質土器皿・内耳鍋、古瀬戸天目茶碗・折縁深皿、等が得られている。これらの内容については遺物の項で詳述するが、时期的には概ねAゾーン平場の1～2面段階に併行するものと考えられる。

その他、整地土層内からの出土品は、2C1a トレンチの中層～下層より青磁鎗蓮弁碗の破片が3点出土した。上述の平場上の遺物とは時期差が認められるが、他に出土品がないためこれを直ちに造成の時間差に結び付けてよいものか今回の調査結果では確認を得ない。



第14図 2C1a トレンチ



2C1b トレンチ土層追記

- P1403 a 10YR4/3 黄褐色土粒少, 炭粒少
 P1404 b 10YR4/3 黄褐色土粒少, 炭粒少
 c 10YR4/3 炭粒層 (柱脚)
 d 10YR4/3 黄褐色土粒多, 炭粒層
 溝 1405 e 10YR4/3 黄褐色土粒多, 灰色土粒多, 炭粒少, 粘土層少
 f 10YR4/3 黄褐色土粒多, 灰色土粒多, 炭粒多, 粘土層多
 壁面 1 10YR4/3 黄褐色土粒多, 灰色土粒多, 炭粒少, 粘土層少
 2 10YR4/3 炭粒多, 粘土層少
 3 10YR4/3 黄褐色土粒少, 灰色土粒多, 炭粒少, 粘土層少
 4 2.5Y5/4 黄褐色土粒多, 灰色土粒少, 暗褐色土粒多, 炭粒層
 5 2.5Y4/2 黄褐色土粒少, 灰色土粒少, 炭粒少
 6 2.5Y4/2 黄褐色土粒多, 灰色土粒少, 炭粒少
 7 10YR3/3 灰色土粒多, 炭粒層
 8 10YR3/1 黄褐色土粒層 (粘土)
 9 10YR4/1 炭分沈殿 (シルト), 自然堆積
 10 10YR3/1 炭分沈殿 (シルト), 自然堆積
 11 10YR4/1 (シルト), 自然堆積
 12 10YR4/3 小礫少 (シルト), 自然堆積
 13 7.5YR2/2 炭分沈殿 (シルト), 自然堆積

2C1a トレンチ土層追記

- P1401 a 10YR4/3 黄褐色塊多, 灰色土粒多, 炭粒層
 b 10YR4/3 黄褐色塊多, 灰色土粒少, 炭粒層
 P1406 c 10YR3/1 黄褐色砂粒少, 炭粒層
 P1408 d 10YR4/1 黄褐色土粒多, 灰色土粒少
 壁面 1 10YR3/3 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒少, 灰色土粒少, 炭粒層
 2 10YR5/2 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒多, 灰色土粒少, 炭粒層
 3 10YR5/3 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多, 灰色土粒多, 炭粒層
 4 10YR5/2 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒多, 灰色土粒少
 5 10YR5/3 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多, 暗褐色土粒多, 灰色土粒少, 炭粒層
 6 10YR5/2 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒少, 暗褐色土粒少, 灰色土粒少, 炭粒少
 7 10YR4/1 黄褐色土粒少
 8 10YR4/2 黄褐色土粒少
 9 10YR4/2 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒少
 10 10YR4/3 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒少, 炭粒少
 11 10YR5/3 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒少, 灰色土粒多
 12 10YR4/3 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多
 13 10YR5/4 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒多
 14 10YR5/2 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒多, 茶褐色土粒多, 炭粒層
 15 10YR3/4 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多
 16 10YR3/4 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多, 灰色土粒多
 17 10YR3/4 黄褐色土粒多, 黄褐色土粒少
 18 10YR3/3 黄褐色土粒少, 灰色土粒多
 19 10YR3/3 黄褐色土粒多, 灰色土粒多
 20 10YR5/1 黄褐色土粒少, 茶褐色土粒少

- 中世またはそれ以降の整地土 (上層)
- 中世整地土 (上層)
- 中世整地土 (中層)
- 中世整地土 (下層)
- 自然堆積層 (水成堆積)
- 古代の遺物包含層 (黒色土)
- 地山

- 21 10YR5/1 黄褐色土粒少, 茶褐色土粒多
 22 10YR3/1 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多, 炭粒少
 23 10YR4/1 茶褐色土粒多, 炭粒層
 24 10YR4/2 黄褐色土粒少, 炭粒層
 25 10YR4/2 黄褐色土粒少, 灰色土粒少, 炭粒多
 26 10YR4/2 黄褐色土粒多, 灰色土粒多, 炭粒少
 27 10YR3/2 黄褐色土粒少, 灰色土粒少, 黒色土粒少, 炭粒少
 28 10YR4/1 黄褐色土粒少
 29 10YR4/1 炭粒少
 30 10YR5/3 シルト, 黄褐色砂粒少
 31 10YR3/1 炭粒少
 32 10YR4/1 黄褐色土粒少
 33 7.5YR4/4 シルト, 炭分沈殿
 34 10YR5/3 小礫多, 砂
 35 10YR3/1 粘土
 36 7.5YR4/4 砂層
 37 10YR4/1 粘土
 38 10YR4/3 黄褐色砂粒多
 39 10YR4/1 黄褐色砂粒少, 暗褐色土粒少
 40 10YR3/1 炭粒少
 41 10YR4/2 炭分沈殿, しまる
 42 10YR3/1 黄褐色土粒少, 炭粒少
 43 10YR3/1 黄褐色土粒層, 炭粒層
 44 10YR5/2 黄褐色土粒少, 黄褐色土粒多
 45 10YR3/2 黄褐色土粒多, 灰色土粒多

第15図 2C1b トレンチ

第3節 遺物

1 焼物（第3表・第16・17図）

2次調査出土の焼物のうち、特に搬入品については小野正敏氏、水澤幸一氏、市川隆之氏の指導を受け執筆を行った。また、古代の須恵器などの器種の分類・時期については『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4松本市内その1総論編』（長野県埋蔵文化財センター1990）に従った。

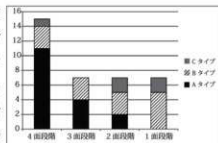
(1) 2A1トレンチ出土の焼物

ア 1面整地土

染付(1) 外面に唐草紋が施された口縁部が端反りする皿である。染付皿B1群に該当する（小野1982）。明代の青花と推定され、15世紀中頃～16世紀中頃に属す。1面段階の時期を知るための貴重な資料である。

イ 土壘南空間（1～2面）

土師質土器（2～14）皿が13点図示できた。全点ロクロ成形によるもので、口縁をヨコナデするものが目立つ。底部は回転糸切りである。法量は口径が8cmを切るものから15cmを越えるものまでバリエーションに富む。この中で特徴的なものとして、体部立ち上がり際にナデを行い、見込み部分が鳥状に盛り上がるもの(2)と盛り上がりの部分をオサエなどで窪ませるもの(9)がある。前者をBタイプ、後者をCタイプと分類した。両者は2面段階以降その出土割合が多くなる。その傾向を第16図に示した。なおここでは中央部の盛り上がり部分に一方にナデをいれるAタイプは出土していない。1～2面段階の特徴と言える。



第16図 皿3タイプの変遷

13点の皿の内7点にススの付着が見られ、灯明皿として使用されていた可能性が高い。これらの皿は在地産のものが主と推定される。ただ5・8・11は色が淡褐色のいわゆる白カワラケで、在地産かどうかは疑問である。京都の白カワラケを意識して製作されたものと思われる。

大窯陶器（15～17）15は大窯1段階の小碗である。内外面ともに灰釉を施軸している。16は丸碗の底部である。貼り付け高台で垂直にのびる。底裏に灰釉が施軸される。大窯1段階前半と推定される。17は口縁部のみであるが、内外面に灰釉を施し黄灰色を呈する。滑らかな湾曲と口縁端部が比較的大きくおさまることから大窯2段階前半の丸碗Aと考えられる。以上のことから1～2面段階には確実に大窯製品が搬入されており、15世紀末葉から下限は16世紀段階であることが指摘できる。

青磁（18・19）18は小破片であるが龍泉窯産の片切形による菊蓮弁紋碗と推定される。19は碗の底部破片である。見込みに印花紋が施されている。

東海系無釉陶器（20）捏鉢が一点出土している。胎土色調は灰色で須恵器に近い。口唇部を丸く作り出したあとに明瞭な溝を刻むものでVI類に該当する（野村一寿1990）。14世紀中葉頃のものと考えられる。

瓦質土器（21）播鉢である。小破片ながら内面に3単位の播り目が認められ、播り目1単位も9条程が確認される。瓦質土器の播鉢は陶器を模倣した室町時代を中心とする製品とされる（鋤柄俊夫1995）。

土師質土器（22～25）在地産と推定される内耳鍋の口縁部3点と胴部下半部が1点出土している。22～24は口縁内面にナデによる凹線が認められ、市川隆之氏の分類B類に該当し（市川1999）、15世紀後半～16世紀初頭に位置付けられる。25は推定底径17cmで内面に工具によるナデが行われている。

炆器（26）珠洲焼の甕が出土している。口縁部が「く」の字に外反しヨコナデを施し、端部を厚く丸目

におさめる。吉岡康暢氏の編年Ⅲ期に該当し、13世紀後半の年代が与えられる(吉岡1994)。

大窯陶器(27) 壺体部の破片である。釉は茶系の褐色を呈し、中国産の褐釉四耳壺の可能性もあるが、釉の色がやや異なり、胎土は白色である。このことから褐釉四耳壺を模した祖母懷壺ではないかと思われる。古瀬戸後期からみられるが、出土層位を重視すれば大窯期のものと推定される。ただ大窯は鉄釉が主である点で問題が残る。一乗谷朝倉氏遺跡からは中国産の褐釉四耳壺が出土している。

須恵器(28・29) 28は長頸壺の口縁～頸部である。口縁部の端部に口縁帯が形成されており、長頸壺Aに分類される。奈良時代に現れ平安時代前期まで生産される。29は壺の底部にあたる。

ウ 2面検出面

古瀬戸陶器(30) 内外面に灰釉が施された折縁深皿の口縁部である。口縁は外折するが内側に折り返されることなく端部は丸くおさまる。第5型式に該当し古瀬戸後期Ⅳ期古段階に属する(藤澤良祐2008)。15世紀中葉～後葉のものである。

土師質土器(31～33) 皿3点を図示した。全てロクロ成形で、底部は回転糸切りである。33は推定口径が14.4cmで器高3.4cmを測る。1次調査では2面段階で口径13cm、器高3cmを越えるものは確認できておらず、その中で1～3群のグループ分けを行ったが、33の出土によってもうひとつの法量のグループ(4群)が存在していたことが明らかとなった。なお、32・33は内面にスズが付着しており灯明皿であった可能性が高い。

エ 2面整地土

青磁(34) 碗の底部である。見込みに印花紋が認められる。豊付から底面は露胎である。灰色の薄い釉が施されており、上田秀夫氏分類のD-1類(上田1982)と思われる。薄手の端反碗で14世紀末から15世紀初頭に位置つきそうである。

土師質土器(35) ロクロ成形で推定口径14.8cm、器高3.7cmを測る皿である。前述の33とほぼ同じ法量であり、2面段階の4群に属する資料である。

古瀬戸陶器(36) 楕円形小鉢である。器壁が開き気味で口縁部内側に小突起が形成される。口縁部のみ鉄釉が施されている。古瀬戸後期Ⅲ期～Ⅳ期古段階に属する。15世紀前半～中頃のものである。

オ 土壘盛土(4面段階)

古瀬戸陶器(37) 器壁が厚く、外面はロクロナデによって波打つ。折縁深皿の体部と推定される。内外面に灰釉がナガシカケされ、内面底部方向への釉の刷毛塗りがされていることから古瀬戸後期前半のものと考えられる(藤澤良祐1995)。

白磁(38) 四耳壺の体部と推定される。内外面に淡灰色の釉が施される。白磁四耳壺は12世紀～13世紀を中心とし14世紀前半まで認められる(山本信夫1995)。

カ 石積前空間(3面段階)

土師質土器(39) ロクロ成形で内外面が淡褐色の白カワラケである。口縁部が欠損しているため口径は不明だが底径が6.2cmを測り、3面段階としては大きめな皿といえる。

キ 耕作土

炆器(40) 珠洲焼の裏体部が出土している。外面に平行タタキを施し内面にナデを行う。

ク 旧表土(5面)

須恵器(41～43) 41は杯蓋Bで中央部にやや扁平な摘みがつく。42は杯Aである。43は短頸壺の頸部である。短頸壺Cに近い器形であるが頸部がやや外傾したり直立するのに対し、内傾気味に立ち上がるところが特徴的である。これらの須恵器は奈良時代に出現し平安時代前半まで生産される。殿村遺跡付近で確認された須恵器窯を始めとして斎田原の古窯跡群など地元産の須恵器との関係が注目される。

(2) 2C1b トレンチ出土の焼物

ア 溝 1405

土師質土器 (44～46) 44・45 はロクロ成形の皿である。44 は底部回転糸切りが行われている。45 は口径が 19.2 cm と非常に大きく底部は手持ちヘラケズリが行われている。これは 1 次調査概報で示した A 区の 1 面段階でみられる手法である。46 は内耳鍋で口縁部内面にナデによる 3 本の凹線がみられる B 類である。同様のものは A 区の 1 面段階でも多く出土しており、溝 1405 はその時期に対応するものと推定される。

イ 検出面

土師質土器 (47) ロクロ成形の皿である。小破片であるが底部の回転糸切りが確認できる。

古瀬戸陶器 (48・49) 48 は 37 と同じ器種で、外面はロクロナデで波打ち状になる。内外面とも灰釉が施され器壁は厚い。折縁深皿の体部と推定される。49 は鉄釉が施された天目茶碗の口縁部である。古瀬戸後期のものと思われるが小破片であるため詳細は不明である。

ウ 整地土

青磁 (50) 小破片であるが龍泉窯産の鎧蓮弁紋の碗である。

須恵器 (51) 壺の底部である。外面が水平で高台がやや外反する。長頸壺あるいは短頸壺と思われる。

エ 包含層

黒色土器 A (52) 内面のみ黒色処理された土師器の碗で、内面にミガキが行われている。平安時代の前半頃から製作され、平安時代の終末頃まで存在するが、末期はミガキが省略される。

須恵器 (53・54) 53 は四耳壺である。肩部に突帯がめぐることから突帯付四耳壺とも呼ばれる。平安時代初期から中頃を中心に製作された。54 は器壁の厚い大き目の甕である。外面はタタキが行われ、内面はナデが施される。奈良時代から平安時代の中頃を中心に生産されている。

(3) 2C1a トレンチ出土の焼物

ア 整地土

青磁 (55～57) 3 点とも龍泉窯産で片切彫の鎧蓮弁紋の碗である。釉は灰色である。上田秀夫氏分類の B-1 類に該当し 13 世紀末～14 世紀前半に属すると思われる (上田 1982)。

須恵器 (58) 長頸壺の頸部である。口縁部も肩部も残らないので分類は不明である。

古瀬戸陶器 (59) 天目茶碗である。被熱をしているため釉が変色している。高台が残っていないため断定はできないが、体部がやや丸みを帯び口縁部があまりくびれることなく緩やかに立ち上がっている点を特徴と捉えると、天目茶碗Ⅱ類の第 2 型式に該当するようと思われる (藤澤良祐 2008)。古瀬戸後期Ⅲ期 (15 世紀前葉) の可能性が高い。

イ 攪乱

須恵器 (60) 長頸壺の頸部が見つかっている。上部に向かって器壁が薄くなっている。

<引用文献>

- 市川隆之 1999 『4 章 3 節出土遺物』『小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
上田秀夫 1982 『14～16 世紀の青磁碗の分類』『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982 『15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代』同上
齋藤俊夫 1995 『各地の瓦質土器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
野村一寿 1990 『第 3 章 第 6 節中世土器・陶磁器』『総論編』長野県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1995 『古瀬戸』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
2008 『第 5 章古瀬戸後期様式の編年』『中世瀬戸窯の研究』
山本信夫 1995 『中世前期の貿易陶磁』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』

第3表 焼物一覧

No.	出土地点	器種	形状	口径 (cm)	残存率			土色	成用・装飾・形制の特徴	
					口縁	底縁	身			
1	2A1 1	土胎焼土	壺形	底 7.0	高 1.8			白	ロクロナデ、内面黒染、外底赤文、内外面自然釉、底付口蓋	
2	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (7.0)	(5.4)	2.2	わずか	1/3	黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り、外面・底面赤土付着
3	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (7.0)	(6.4)	1.9	1/6	1/6	黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り
4	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 6.0	(5.2)	(1.7)	1/10		黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り、内面シズメ状に土付着
5	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 6.0	(5.6)	2.1	1/5	1/6	黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り、底面に土付着
6	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 6.0					黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面にターム状の土付着
7	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (10.0)	(6.6)	2.3	わずか	1/8	黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り、外面赤土付着
8	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (10.0)					黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面に一部土付着
9	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 6.0				1/4	帯周一帯周	ロクロナデ、底面回転糸切り
10	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (10.4)	7.3	2.3	わずか	3/4	黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面一方ナデ、底面回転糸切り
11	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (10.6)	(6.0)	2.7	1/10	3/4	黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り
12	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (12.4)	(7.0)	(2.6)	1/6	わずか	帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面に土付着
13	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	底 (15.4)					帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面土付着
14	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器				わずか		帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面・底面に土付着
15	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器 (大塚)	小碗 (11.4)			1/6	灰釉	黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内外面黒染
16	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器 (大塚)	壺	(4.2)		わずか	灰釉	黒染	ロクロナデ、外面一帯周回転糸切り、高台付、内外面・底面黒染
17	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器 (大塚)	壺			わずか	灰釉	黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内外面黒染
18	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	青磁	壺				青磁	灰	ロクロナデ、底面赤文、内外面黒染
19	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	青磁	壺				青磁	灰	ロクロナデ、裏面出し高台、底面印文、底面黒染
20	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器 (東北系陶器)	腰鉢			わずか		灰一帯周	ロクロナデ、底面黒染
21	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	瓦葺土器	腰鉢					灰泥一帯周	ロクロ成形、内面黒染り目、外底黒土付着
22	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	内耳黒			わずか		帯周	ロクロ成形、口縁ヨコナデ、内面黒染、外面赤土付着
23	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	内耳黒			わずか		帯周	ロクロ成形、口縁ヨコナデ、内面黒染
24	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	内耳黒			わずか		帯周	ロクロ成形、口縁ヨコナデ、内面黒染、外面赤土付着
25	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	土胎質土器	内耳黒	(17.0)		わずか		帯周一帯周	ロクロ成形、底面黒染り目、高台付、内外面赤土付着
26	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	磁器 (珠漆)	壺			わずか		帯周	口縁ヨコナデ、外面平行タタキ、内面ナデ、1次黒染 139 と同一特徴か
27	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器 (大塚)	四耳壺				灰釉	黒染	ロクロナデ、外面回転糸切り、外面黒染
28	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器	長瓶					黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面自然釉
29	2A1 1-2	土胎赤土質 (焼土・赤)	陶器	壺 (6.0)			わずか		帯周	ロクロナデ、底面ナデ
30	2A1 2	焼土部 (白磁部)	陶器 (古瀬戸)	新緑深皿			わずか		灰釉	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内外面黒染
31	2A1 2	焼土部 (白磁部)	土胎質土器	壺	(5.0)			1/4	帯周	ロクロナデ、底面回転糸切り、外面シズメ状の土付着
32	2A1 2	焼土部 (白磁部)	土胎質土器	壺	(6.6)			1/4	帯周一帯周	ロクロナデ、底面回転糸切り、内面赤土付着
33	2A1 2	焼土部 (白磁部)	土胎質土器	底 (14.4)	(7.0)	(3.4)	わずか	1/4	青磁	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り、内面赤土付着
34	2A1 2	2 白磁部	青磁	壺 (5.0)				1/4	青磁	ロクロナデ、裏面出し高台、裏付一帯周黒染、底面印文
35	2A1 2	2 白磁部	土胎質土器	壺 (14.8)	(6.6)	(3.7)	わずか	わずか	灰釉	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り
36	2A1 2	2 白磁部	陶器 (古瀬戸)	深鉢(少鉢)	(17.6)		1/6	1/6	灰釉	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口縁部黒染
37	2A1 4	土胎 (緑土)	陶器 (古瀬戸)	新緑深皿					灰釉	ロクロナデ、内外面黒染
38	2A1 4	土胎 (緑土)	白磁	四耳壺					灰釉	ロクロナデ、外面回転糸切り、外面黒染
39	2A1 3	石製土質	土胎質土器	壺 (6.2)			1/3		黒染	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り
40	2A1 3	磨作土	磁器 (珠漆)	壺					帯周	外面平行タタキ、内面ナデ
41	2A1 5	灰台	灰器	鉢蓋 (6.2)					帯周	ロクロナデ、天井部回転糸切り、つまみ取付
42	2A1 5	灰台	灰器	杯 (1.0)					帯周	ロクロナデ、底面黒染
43	2A1 5	灰台	灰器	短瓶 (1.0)					帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ
44	2C1b	黒 1405	土胎質土器	底 (19.0)	(7.2)	(2.4)	1/4	1/6	黒染一帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面回転糸切り
45	2C1b	黒 1405	土胎質土器	底 (19.2)					帯周	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底面平行糸切り、内外面赤土付着
46	2C1b	黒 1405	土胎質土器	内耳黒 (27.2)					帯周	ロクロ成形、口縁ヨコナデ、底面黒染り目、内面黒染
47	2C1b	黒 1405	土胎質土器	底 (6.2)			わずか		帯周	ロクロナデ、底面回転糸切り
48	2C1b	黒 1405	陶器 (古瀬戸)	新緑深皿					灰釉	ロクロナデ、内外面黒染
49	2C1b	黒 1405	陶器 (古瀬戸)	天目茶碗 (10.4)					灰釉	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内外面黒染
50	2C1b	黒 1405 (7 磨)	青磁	壺					青磁	ロクロナデ、底面赤文
51	2C1b	黒 1405 (5 磨)	陶器	壺 (7.0)					灰	ロクロナデ、底面回転糸切り高台取付
52	2C1b	古代灰台 (42 磨)	黒色土器	壺 (6.6)					黒染	ロクロナデ、内面ミガキ・黒色黒染、底面回転糸切り後高台取付
53	2C1b	古代灰台 (42 磨)	陶器	四耳壺					帯周	内面ナデ、外面部黒染取付・ロクロナデ、耳部取付
54	2C1b	古代灰台 (42 磨)	陶器	壺					黒染一帯周	外面ナデ、内面ナデ、底面不長
55	2C1a	黒 1405 (30 磨)	青磁	壺			わずか		青磁	ロクロナデ、ヨコナデ、底面赤文
56	2C1a	黒 1405 (22 磨)	青磁	壺			わずか		青磁	ロクロナデ、ヨコナデ、底面赤文
57	2C1a	黒 1405 (25 磨)	青磁	壺					青磁	ロクロナデ、ヨコナデ、底面赤文
58	2C1a	黒 1405	陶器	腰鉢					灰釉	ロクロナデ
59	2C1a	黒 1405 (土層)	陶器 (古瀬戸)	天目茶碗 (11.4)					灰釉	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、外面回転糸切り・灰釉
60	2C1a	黒 1405	陶器	長瓶					灰釉	ロクロナデ、外面自然釉

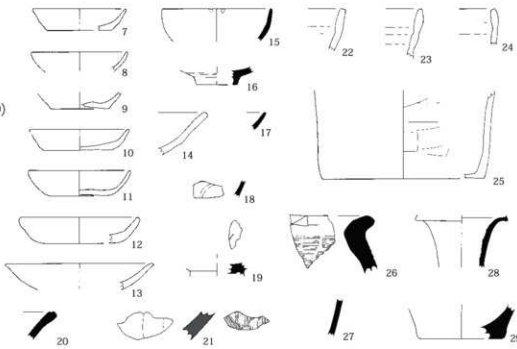
※注欄の○は記載値を表す

2A1 トレンチ

1面整地土 (1)



土壘南空間 (2~29)



2面検出面 (30~33)



2面整地土 (34~36)



土壘盛土 (37~38)



石積前空間 (39)



旧表土 (41~43)



耕作土 (40)



2C1b トレンチ

溝 1405 (44~46)



検出面 (47~49)



2C1a トレンチ

整地土 (55~59)



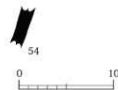
攪乱 (60)



整地土 (50・51)



包含層 (52~54)



第17図 焼物

2 石器・石製品

本次調査では2A1トレンチを中心に合計25点の石器と石製品が出土している。内訳は石鉢3点、石臼3点、硯1点、サイドスクレーパー1点、二次加工のある剥片1点、石核3点、剥片7点、礫片1点、不明5点がある。このうち中世に帰属する可能性のあるものや定型的な石器を中心に11点を図示した。

石製品の時代区分は共伴遺物に相当するものとし、石臼と硯は13世紀後半から16世紀中頃に帰属すると推定できる。石鉢は15世紀から全国的に流通し始めるので、15世紀代から16世紀中頃のものと考えられる。この他に、整地土や土塁、土塁南空間の埋立土などの搬入土に粉れ込んだ黒曜石製またはチャート製のサイドスクレーパーや二次加工のある剥片、石核、剥片、礫片も出土している。図示したものを中心に所見を書く。図番号は一覧表の番号に相当する。

石鉢(1~3) 2と3はそれぞれ1面整地土と石積前空間の木器包含層からの出土。2点とも安山岩製で、小破片であるが側面に成形時の帯状の加工痕が確認できる。内面はいずれも被熱で焼け、使用により磨滅している。3は底部1/4程度が残存する。3は口縁の一部のみ出土し、推定口径は210mmである。1は安山岩製で土塁南空間から出土している。熱を受けたせいか全体的に黒ずんでいる。片口が認められ、その断面はU字形である。側面には他と同じように帯状の加工痕がみられる。内面には明白な使用痕は確認できなかった。

千曲川流域の信濃東北部に石鉢が出土している例は多くある(前山田遺跡・北乃脇遺跡・栗田城跡など)。東海系の捏鉢が多く入る松本平をはじめとした信濃中南部では石搥鉢の需要は信濃東北部に比べ少ない傾向がある。14世紀後半に捏鉢から古瀬戸の搥鉢に替わる際、一時的な供給量の減少を補うため千曲川水系から土製の搥鉢が供給される(原明芳1995)。このため、石鉢が石臼と並び本遺跡において石製品の中で比較的多く出土していることは特筆すべきことである。松本平でも搥鉢の補完として石鉢が使われていたのか、またこれらの製品が信濃東北部からもたらされたものなのか、検討が必要である。

石臼(4~6) 4・5は安山岩製で上臼の上縁である。小破片での出土のため詳細は明白ではない。緻密さに欠ける石質のため、粉挽き臼と考えられる。5の表面に被熱痕が確認できる。6は白面部分が剝離しており分画数や溝数は確認できない。断面形状から粉挽き臼の上臼と推測できる。石材は安山岩製である。熱を受けている可能性がある。本次調査では、本遺跡を特徴づける茶臼の出土は1点もみられなかった。

硯(7) 長軸に割れているが、長さ152mmに残存幅71mmと所謂「五三寸」の規格と思われる。陸部が全面的に剝離している。丹波鳴滝産の珪質粘板岩製であり、基盤土から出土している。表面及び剝離面に被熱が確認できる。裏面にノミの整形痕が数か所認められることから、硯の整形過程を知るための重要な資料となりえよう。1次と本次合わせて3点の鳴滝産硯が出土したことになる。

サイドスクレーパー(8) チャート製で土塁南空間の埋立土中から出土した。剥片を素材とし、縁辺部に連続した微細剝離がみられる。

二次加工のある剥片(9) チャート製で土塁から出土した。折れが生じている。微細剝離が縁辺部にわずかに確認できる。

石核(10・11) 10はチャート製で剥片を素材とし、縁辺に微細な剝離が観察できる。11は黒曜石製である。打面の位置に規則性はみられない。

剥片 7点出土しており、内4点はチャート製で3点は黒曜石製である。

礫片 珪化木が土塁から1点出土している。四賀地区一帯は新生代第三紀の化石を多く含む地層が分布しているため、土塁形成時の搬入土がこの地層に属すると推測できる。

不明 不明品のうち4点は小片のため器種同定が難しい。頁岩製で研磨面を有し整形してあるものは硯に、砂岩製は砥石に分類される可能性がある。安山岩製で、ノミ等で整形された痕があるものは石鉢や石臼の破

片か。また長辺 194mm で短辺 169mm の砂岩製の扁平な石が土壘南空間から出土している。表面に 3 条の筋が確認できる。台石もしくは砥石などが考えられる。

石臼や石鉢、硯はいずれも破片で出土し、熱を受けているものが多い。これは 1 次調査においても同様な傾向で、石列や礎石の遺構構築材の被熱とともに注意される。

<引用文献>

原 明芳 1995 「中部」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

三輪茂雄 1978 『ものと人間の文化史 25・白』法政大学出版局

第 4 表 石器・石製品一覧

No.	図 No.	器種	出土位置		石材	寸法 (mm)			重量 (g)	備考	
			トレンチ	検出面		遺構名	地点	最大長			最大幅
1		石核	2A1		耕作土 (暗渠)	チャート	36	34	24	27.5	
2	10	石核	2A1		耕作土 (2 層)	チャート	32	22	9	7.3	
3		不明	2A1	1	検出面	安山岩	(30)	(23)	(8)	(4.5)	被熱後割れか、石鉢の破片か
4	2	石鉢	2A1	1'	1' 面整地土 (6 層)	安山岩	推定径(総)約 170、高さ(76)			(984.1)	割れ、内面に被熱と摩耗、側面に加工痕有
5		剥片	2A1	1'	1 面整地土下層 ~ 2 面直上	チャート	28	18	7	2.3	鉄分付着
6		剥片	2A1	1'	1' 面整地土上層 (6・7・11 層)	黒曜石	16	15	3	0.5	
7		剥片か	2A1	1'	1' 面整地土上層 (6・7・11 層)	頁岩か	18	16	4	1.0	
8	11	石核	2A1	1~2	焼土 1417	黒曜石	21	8	6	0.9	
9		不明	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・新 (34・35 層)	砂岩	194	169	35	1438.0	表面に筋が 3 条
10	1	石鉢	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・新 (35 層)	安山岩	推定径(不明)、高さ(77)			(484.4)	割れ、片口有(断面は U 字形)、側面に加工痕有
11	4	石臼	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・中 (36 層)	安山岩	推定径(上縁)375、高さ(53)			(336.5)	割れ、上臼の上縁
12	5	石臼	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・古 (40・55 層)	安山岩	推定径(上縁)220、高さ(31)			(71.0)	割れ、上臼の上縁、被熱か
13	8	サイドスクレーパー	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・古 (47 層)	チャート	30	27	8	5.9	
14		不明	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・古 (47 層)	砂岩	(30)	(26)	(5)	(5.1)	割れ、砥石の可能性有、研磨(砥)面有
15		剥片	2A1	1~2	土壘南空間 埋立土・古 (88 層)	チャート	29	19	7	3.0	
16		不明	2A1	2	P1428	頁岩か	(29)	(21)	(8)	(4.8)	割れ、硯の可能性有、被熱か
17	3	石鉢	2A1	3	石積前空間 木屑包含層 (76 層)	安山岩	推定径(総)約 210、高さ(74)			(345.1)	割れ、内面に被熱と摩耗、側面に加工痕有
18	7	硯	2A1	3	石積前空間 底面	珪質粘板岩	152	(71)	17	(207.1)	割れ、裏面ノミ痕有、割れ後被熱、鳴滝産
19		剥片	2A1	4	土壘 盛土中~下層 (b・c 層)	チャート	41	40	9	10.9	
20		礫片	2A1	4	土壘 盛土中~下層 (b・c 層)	珪化木	40	33	14	22.3	
21		剥片	2A1	5	地山 (89 層・旧表土)	黒曜石	24	16	3	1.6	
22		剥片	2A1	5	地山 (89 層・旧表土)	黒曜石	19	16	5	1.4	
23	9	二次加工有	2A1	5	土壘 地山 (83 層・旧表土)	チャート	32	(18)	6	(4.1)	割れ、微細剥離有
24		剥片	2A1	5	土壘 地山 (83 層・旧表土)	チャート	22	14	3	0.9	
25	6	石臼	2C1a		排土	安山岩	推定内径(375) 高さ(870)			(2085.0)	割れ、上臼か

※寸法欄の () は現存値を表す



第18图 石器·石製品

3 土製品・金属製品・鍛冶関係資料 (第5表・第19図)

(1) 土製品

鍛冶関係資料以外の1点のみ図示した。5は2A1トレンチの2面整地土層から出土した土製円板で、直径5.3cm・厚さ9～10mm、外縁の約1/5を欠く。内耳筋の胴部片を整形し円板状に仕上げる。

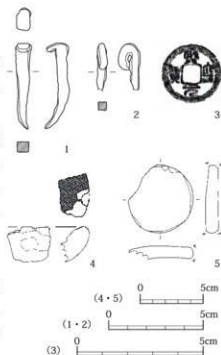
その他に焼粘土塊が6点ある。いずれも不定形な塊状または扁平状を呈し、特に2C1bトレンチの溝1405から多く出土した。いずれも破片のため全形は窺い知れない。橙褐色～茶褐色を呈し焼成良好なものが多く、表面に雑なナデ痕や胎土に繊維状の混入物が観察されるものがある。

(2) 金属製品

2A1トレンチから5点が出土、うち中世に帰属するもの3点を図示した。1は釘で方形の基部先端を叩き伸ばして曲げ、頭部を作りだす。2は頭部が屈曲した釘とも思われるが、全体に錆が進み形状を捉えにくい。3を含め銭2点はいずれも熙寧元寶である。

(3) 鍛冶関係資料

2A1トレンチを中心に淳8点、羽口3点、埴塼1点が出土した。4はナデ、オサエにより整形された椀形を呈する埴塼である。内面は表面が淡黄灰色、内部が黒～赤紫色を呈する滓が口縁端部まで付着し器壁も溶融している。滓はわずかに緑がかった部分も見受けられる。外面も被熱のため器壁が荒れる。羽口はいずれも細片のため図示できなかった。滓はいずれも不定形な塊状を呈する流動滓で、大きさは2cm～6cmである。全体的に気泡が多く比重は小さいうえ磁性もなく、金属成分はほとんど含まない。溶融物は黒色を呈するが、一部が赤紫色や暗緑色を呈するものが目立って多い。また鉄錆が付着しているものは1点しか見られない。外見的特徴から、埴塼や滓の多くは銅鍛冶に関わるものかと推測される。



第19図 土製品・金属製品・鍛冶関係資料

第5表 土製品・金属製品・鍛冶関係資料一覧

ID	探洞	トレンチ	検出面	出土位置	種別	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	1	2A1	2	検出面	鉄	釘	51.0	11.4	8.3	4.1	丸形
2		2A1	1	整地土	滓					4.7	黒～赤紫色
3	3	2A1	2	土1429	銅	銭	24.1	23.6	1.3	2.5	熙寧元寶
4	2	2A1	2	整地土 (下層)	鉄	釘か	24.8	12.4	5.3	1.9	頭部・先端部欠、 屈曲
5		2A1	2	整地土 (下層)	滓					8.3	
6		2A1	2	整地土 (下層)	滓					33.3	暗緑～赤紫色
7		2A1	2	整地土 (東壁)	銅	銭	24.3	24.2	1.1	1.6	熙寧元寶
8		2A1		耕作土	鉄	釘	52.0	5.8	5.5	2.3	丸釘
9		2A1	1～2	土皇南空間 埋土(中)	滓					9.0	黒色
10		2A1	1～2	土皇南空間 埋土(中)	滓					26.3	黒～赤紫色
11		2A1	1～2	土皇南空間 埋土(中)	滓					24.5	灰～黒灰色
12		2A1		耕作土	鉄	折疊み ナイフ					
13		2C1a		整地土	滓					2.9	黒色
14		2C1a		整地土	滓					42.2	表面鉄錆
15	4	2A1	2	整地土	土	埴塼	46.0	37.0	31.0		内面溶滓淡黄灰～ 赤紫色、一部淡緑 色
16		2A1	2	整地土	土	羽口					体部未接合4片
17		2A1	1'	整地土	土	羽口					体部片
18	5	2A1	1～2	土皇南空間 埋土(古)	土	土製円板	54.0	51.0	9.0		内耳筋体部片、一 部欠
19		2A1	1～2	土皇南空間 埋土(古)	土	焼粘土塊					塊状
20		2A1	1～2	土皇南空間 埋土(古)	土	羽口					体部片
21		2C1b		溝1405	土	焼粘土塊					板状
22		2C1b		溝1405	土	焼粘土塊					未接合2片
23		2C1b		整地土	土	焼粘土塊					板状
24		2C1b		検出面	土	焼粘土塊					角状、表面ナデ
25		2C1b		溝1405	土	焼粘土塊					板状

4 木製品 (第6表、第20図)

2次調査においては、2A1 トレンチ石積前空間 (76層) から105点、2C1a トレンチから9点、2C1b トレンチから1点の木質遺物が出土した。これらの内2C1 トレンチのものは後述するように削り屑が主であるため、2A1 トレンチで出土した木質遺物で残存度が良く、また特徴的な遺物を選択し図示した。以下器種に従って報告をしていく。

下駄 (1) 一木から削り出して作る台方形連歯下駄 (れんじげた) である。長さが21.25cmと小振りのものである。よく使い込まれていて特に後の歯の磨滅が目立つ。

板 (2) 隅丸方形の薄い板である。中央に三角形の孔を穿ててある。蒸籠の底板に見えるが、かなり薄手のもので周囲に側板を装着するのは困難である。また被熱痕も認められない。あるいは土器の瓶類等の底部にはめ込んで使ったものかもしれない。

短冊状板 (3・4・6) 木口を切り落としたり切り折りなどの技法で成形した長方形の小振りの板である。木筒状木製品と呼ばれることもある。3は表面が削りっぱなしで両面調整痕はみられない。4は片面を削り調整している。6は上部木口に平面削りと側面削りを施し、片面を削り調整する。墨痕があるようにもみられるが、はっきりしない。

底板 (5) 本来丸い板を短冊状に切っている。上部に圧痕があり側板が装着されていた名残と認められる。おそらく曲物の底板であったと推定される。黒い付着物があり漆が塗られていた可能性もある。

箸状木製品 (7～18) 殿村遺跡の特徴的な木製品であり、本調査で出土した2A1 トレンチの木質遺物105点中37点で約35%を占める。削り出しによって細棒状のものを作っており、丸木芯持ちのものはみられない。また中には割りによって細い短冊状に作られたもの (10・15) がある。この2点は先端部を斜めにカットし剣先状にするという共通点がある。ほかの観点からも観察してみると、8は表面にほぼ等間隔に斜めの切込みを3ヶ所施している。17は木口に平行に切り込みを入れてあり、10の側面観察からも同じ加工をしていた可能性が示唆される。中世の遺跡からは数多く「箸状木製品」が出土するが、本当にすべてが箸なのだろうか。この点について興味深いのは石川県西川島遺跡群の事例である。桜町遺跡では13世紀前半のSK05から406点の「箸状木製品 (報文中ではハシ状木製品と記す)」に包まれた状態で馬形が出土し、上面の箸状木製品は斎申のごとく突き立てられていたという。また御館遺跡の13世紀後半から14世紀前半のSE03では鳥形木製品がハシ状木製品に覆われて納められていた。さらに白山橋遺跡の木製信仰遺物の埋納遺構 (13世紀後半～14世紀前半) では、獅子頭・舟形・刀形・矢形・鳥形・糸巻きなどが、数千本の箸状木製品に覆われていた (四柳嘉章1996)。このことは仮に「箸状木製品」と呼ばれる遺物の役割を強く示唆していると言える。もちろん箸が全くないとは言わないが、西川島遺跡群の例や殿村遺跡の例をみても、箸状木製品はまとまった形で出土し、その中に刀形などの祭祀具が含まれるのに対し、箸として利用された場合に共存してもよさそうな椀・皿・曲物といった容器類はほとんどないことが指摘できる。この点からは本遺跡の箸状木製品の多くは「聖なる串」「祭りの串」すなわち斎申の系譜をひくものであると推定される。

板 (19～22) 完成品はないが、木口や木端が曲線的に加工されている特殊な板が出土した。薄手で屈曲部があり曲物などの底板とは異なる性格のものと推定される。1次調査では類似した加工の木製品として刀形が認められた。22はかなりシャープに加工されているので、刀形の部類に属するかもしれないが、19～21はよりフラットな曲線と言える。その形状や76層から出土している木製品の特徴から考えてやはり実用品とは異なる祭祀に関わるものと推定される。

板 (23) 両木口は欠損しているが木端は生きている。右側が曲線的に加工されており、中央には何かに接着されていたと思われる付着物がある。何か器状の木製品などの周囲に貼り付けられていたものか。

端材 (24) 殿村遺跡の木質遺物のうち、箸状木製品と同じく出土割合が高いのが木材の加工に伴って発生する削り屑と加工木材などを成形する際に発生する端材である。これらは木製品ではなく木製品を製作する際に出てくる余分な部分といえる。2次調査でも2A1 レンチと2C1 トレンチから出土した木質遺物115点中35点で約30%を占める。千曲市(旧更埴市)の屋代遺跡群でも古代に属する多量の端材(切り屑)や削り屑が出土し、木質遺物の分類中「屑」と総称して報告した(宮島義和1999)。殿村遺跡近辺においても木材加工が活発に行われていたことを示す良い資料である。24は下側の木口が鋸で切断されている。角材を調えるために手斧などではつられたとも推定されるが、その木裏に菱形とその対角線が刻まれている。木表に刻まれていれば材を見分ける記号ともとれるが、廃棄してしまう端材となった後に木裏に図形を刻んだ意味は今のところ不明である。

椀 (25) 第1次調査概報において漆器椀の蓋として掲載したものである。発刊後水澤幸一氏から15世紀の段階ではまだ蓋は存在しないという指摘を受けた。本製品は4面の出土であり15世紀のものであることから本報告において修正し椀として再掲載した。

<引用文献>

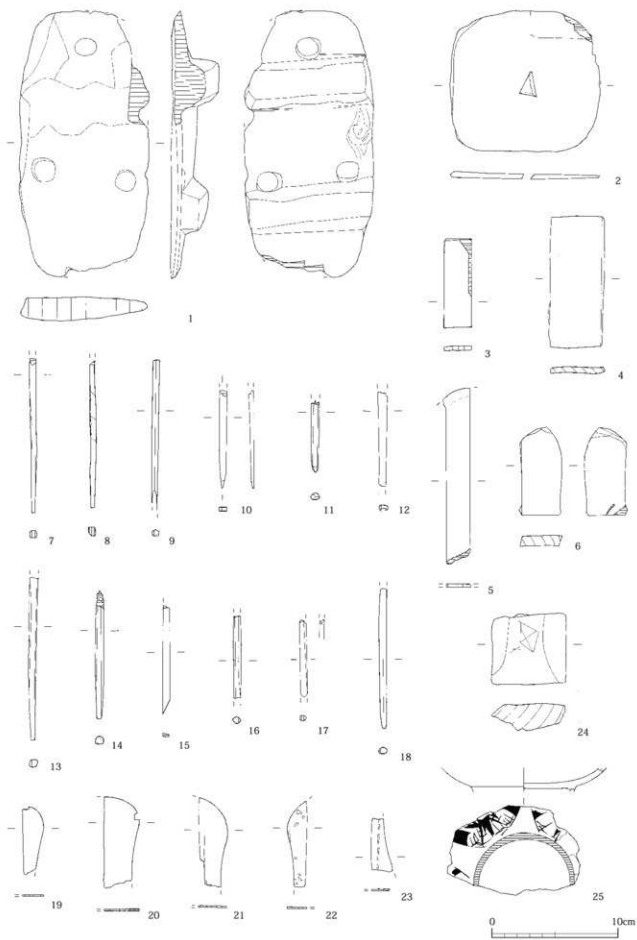
四柳嘉章 1996 「西川島遺跡群」『飾る・遊ぶ・新るの木製用具』北陸中世土器研究会

宮島義和 1999 「第5章第7節古代の木質遺物」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群古代1編』長野県埋蔵文化財センター

第6表 木製品一覧

調査 No.	地区	検出面	出土地点 遺構	整理番号	器種	手法	寸法 (cm)			備 考
							長・口徑・底徑	幅	厚・高	
1	2A1	3	石横前空間 (76層)	002	下駄	角材 (造椀目)	21.25	10.15	1.95	台方形遺跡下駄/前の方に狂疵/欠損有り 鉄分付着/面は片削りに減っている
2	2A1	3	石横前空間 (76層)	007	板	板材 (板目)	11.1	11.90	0.50	歪みあり/割れあり/付着物あり/中心に 三角形の穴
3	2A1	3	石横前空間 (76層)	009	短冊状板	板材 (板目)	7.1	2.20	0.40	木口片方切り落し/片方切り折し/木端 に欠損あり/両面共に割れ割がしか?/調 整痕は見えない
4	2A1	3	石横前空間 (76層)	008	短冊状板	板材 (板目)	10.46	4.37	0.53	歪みあり/木口切り落しと/左右の木端 線子が違う/若干の鉄分付着/片面若干の調 整あり
5	2A1	3	石横前空間 (76層)	004	底板	板材 (板目)	(14.00)	(1.90)	0.25	側板痕あり/黒い付着物あり/歪み大
6	2A1	3	石横前空間 (76層)	104	短冊状板	板材 (造椀目)	6.95	3.30	0.88	木口片方切り落しと/片方は再利用のため か加工が働いている/片面に黒痕がある か?
7	2A1	3	石横前空間 (76層)	015	箸状木製品	角材 (板目)	(12.30)	0.55	0.60	上方欠損/加工痕あり
8	2A1	3	石横前空間 (76層)	016	箸状木製品	角材 (板目)	(11.70)	0.55	0.65	上方欠損/表面に等間隔で切込3ヶ所/煮 串か
9	2A1	3	石横前空間 (76層)	013	箸状木製品	角材 (板目)	(12.00)	0.50	0.55	上方欠損/木口からの切込痕あり/先端削 先状/煮串か
10	2A1	3	石横前空間 (76層)	099	箸状木製品	板材 (板目)	(7.70)	0.60	0.35	上部欠損/鉄分付着/両面割れ割がし
11	2A1	3	石横前空間 (76層)	098	箸状木製品	棒材 (削出)	(5.70)	0.65	0.55	上部欠損/下部筋状に削りだし
12	2A1	3	石横前空間 (76層)	078	箸状木製品	棒材 (板目)	(7.50)	0.70	0.40	両木口欠損/表面は調整あり/裏面は剥離 欠損あり
13	2A1	3	石横前空間 (76層)	014	箸状木製品	角材 (板目)	(13.00)	0.75	0.65	上方欠損/加工痕あり/歪みあり
14	2A1	3	石横前空間 (76層)	010	箸状木製品	角材 (板目)	(10.20)	0.68	0.60	加工痕顯著/片方欠損
15	2A1	3	石横前空間 (76層)	100	箸状木製品	板材 (板目)	(8.63)	0.58	0.28	上部欠損/短冊状で先端を尖らす/煮串か
16	2A1	3	石横前空間 (76層)	017	箸状木製品	角材 (板目)	(6.50)	0.60	0.55	上下欠損/加工痕あり
17	2A1	3	石横前空間 (76層)	020	箸状木製品	角材 (板目)	(6.10)	0.60	0.40	上下欠損/上部木口に切込あり/鉄分付着 /煮串か
18	2A1	3	石横前空間 (76層)	011	箸状木製品	角材 (板目)	(11.07)	0.66	0.55	上方欠損/加工痕若干あり
19	2A1	3	石横前空間 (76層)	006	板	板材 (板目)	(5.40)	(1.70)	0.14	欠損あり/付着物あり/木口一端を曲線的 に加工
20	2A1	3	石横前空間 (76層)	003	板	板材 (板目)	(7.23)	(2.83)	0.15	欠損あり/4mm×5mm位の切り込み/木口 を曲線的に加工
21	2A1	3	石横前空間 (76層)	005	板	板材 (板目)	(7.00)	(2.27)	0.10	欠損あり/付着物あり/木口一端を曲線的 に加工
22	2A1	3	石横前空間 (76層)	103	板	板材 (板目)	(6.84)	(1.50)	0.20	欠損大/鉄分付着/木口を曲線的に加工
23	2A1	3	石横前空間 (76層)	102	板	板材 (板目)	(4.20)	1.70	0.15	一部残存/片面に付着物
24	2A1	3	石横前空間 (76層)	101	端材	角材 (造椀目)	(5.50)	5.90	2.10	木口片方縦切し/片方鉋削り/木表方向は 削りっぱなし/木裏は削った後調整/四角 に×の刻みあり
25	1次 A区	4	K-3 トレンチ	TK ⑤ 001	椀	挽物	口径(13.40) 底径(8.30)		(1.80)	内面下地に黒漆/上に赤漆/外面黒漆の上 に文様/舞台全欠/焼け焦げ大

*寸法欄の ○ は現存値を表す



第20図 木製品

第IV章 調査のまとめ

8年にわたる調査事業の第一歩として、平成22年度は前回調査地点近くとやや離れた別地点の2カ所を選定して発掘調査を実施した。終章として2次調査の成果と課題について2点を取り上げまとめたい。

1 石積前空間の構造と性格について

1次調査成果に基づき前報では5段階にわたる平場の変遷段階を仮設した。しかし、その年代観については伴出するわずかな古瀬戸・大窯製品や貿易陶磁に頼ったものであり、今後確実な遺構・層位出土資料を追加していくとともに、何よりも在地産土器の編年を確立する作業を進めなければならない。その点で、今回2A1トレンチでは少量ながらも土塁南空間の埋土の形成時期を窺える資料を得ることができた。一方、遺構の前後関係についても確認が不十分な点が多々あり、今後の調査でそれらを明らかにし、仮設モデルを検証していく必要がある。この点に関して、今回の調査では土塁を伴う石積前空間の構造をより鮮明なものとすることができたが、一方で新たな課題も浮上することとなった。

4面段階において、前面石積(石積A)を伴う平場の正面には土塁を伴う7m幅の通路状空間が置かれていた。通路状空間は西側において石積の取束と連動して上昇し、平場に上る構造であることは前回調査でも明らかであるが、加えて今回、土塁南法面下にもテラス状の空間が存在することが判明した。現状ではこの空間を出入施設と捉え、土塁・石積に沿って平場に至る進入路とみなしておきたい。土塁はおそらく東側未調査範囲に末端があり、通路状空間はそこで土塁南側のテラスに連絡していたのではないかと推測される。こうした構造は平場築造当初に企画され、4面段階～3面段階においてその役割を果たしていたと考えられる。

しかし一方、この空間は3面段階に至ってから流れ込みや廃棄による埋没が進行する。この段階は新設の石積B2・B3を伴う平場の拡張によって空間の東端付近が改変を受けている。これにより平場拡張部と土塁の関係がどのように変化したのか今後の調査で確認しなくてはならないが、通路状空間下層に穏やかな水中で堆積したと考えられるシルト層が厚く形成される状況を見る限り、石積A・B3と土塁の間はある程度の期間水が溜まっていたのではないかと推測される。それが意図的なものかどうかは現時点は確認する術を持たないが、3面段階においてここが閉じた空間になっていた可能性も捨てきれない。いずれにしても、土塁側からの土砂の流入と石積側からの木製品の大量廃棄によって埋没が進んだこの段階には出入施設としての機能を失い、廃棄を伴う別の役割を担った場へと移行していったものと考えられる。

では、ここは単純な廃棄の場であったのか。出土遺物は木製品にほぼ限られ、焼物や石製品がわずしか見られない。その上木製品も箸状木製品や端材・削り屑に偏り食器類をはじめとする生活用品をほとんど含まないという特異な状況を呈していた。ところで、多出した箸状木製品は何を意味するのか。これについては祭祀具の可能性を考えた。既に触れたように、中世の箸状木製品については古代の斎申の性格を継承するものである可能性が指摘され集成も行われている(畑大介2006)。时期的には13～14世紀のものが知られ、祭祀遺構や祭祀空間からの出土例のほか、生活域周辺の井戸、池、溝(流路)、土坑、水田跡等の事例があり、祭祀の後に周辺に廃棄されていることもある。こうした事例に照らすと、本遺跡の箸状木製品は年代的には15世紀代に下るものの、「串状木製品」の総称で集成を行った畑の分類による「箸状木製品」を主体に「棧状木製品」に相当するものが見られる。同時に形代である刀形等も伴っていることから、食器の可能性を排除するものではないものの、その多くを祭祀具と捉えてよさそうである。

石積前空間における箸状木製品の出土状況は祭祀の場をそのままの状態で残すものではないが、近辺で何らかの祭祀が行われその後廃棄された可能性が高い。また、他の遺物がほとんど含まれていない偏った状況は石積前空間が単純な廃棄場ではなく、祭祀空間と深く関わった場であったことを暗示しているのではない

だろうか。これについても、今後の調査の中で明らかにしていかななくてはならない。

2 平場遺構と既存の中世寺院について

1次調査概報において、調査地周辺の地形や地割のあり方から中世の造成が周辺にも広がる可能性を示した。今回その確認作業のひとつとして長安寺の南に広がる雑壇状地形の調査に着手した結果、果たして盛土による平場の構築とその上に展開する遺構群を確認することができた。まだ平場の構造や変遷過程を復元するまでには至らないが、遺構・遺物からAゾーンの平場とは时期的な併行関係にあったことは確かである。これまで、石積を伴う大規模な造成、風炉や上質な茶臼、中国産天目を含めた茶道具の出土、礎石建物の存在等の諸特徴から、Aゾーンで検出された平場遺構の性格は寺院等の宗教施設であろうと推定している。現状ではまだ平場上における遺構の分析が進んでおらず評価は定まらないが、今回のCゾーンにおける平場の検出によりさらに造成の範囲が大きくなり、東西長150m以上に達する壮大な規模であることが確実となった。こうしたあり方は多数の平場で構成される中世寺院跡を彷彿とさせるものである。

そこで、今後一連の遺構を中世の宗教施設として追及していく上で注目しなければならないのが、近接する中世寺院(跡)である長安寺と補陀寺との関係である。まず鷲峯山(旧太平山)長安寺については現本堂が2C1トレンチのすぐ北にある。弘安元年(1278)に渡来禅僧、蘭溪道隆(大覚禪師)により臨済宗寺院として中興開山し、会田氏の全盛期には大きな伽藍を構えていたと伝わる。実際に室町時代前半の制作とされる蘭溪道隆の頂相像が伝来している。一方、同寺は奥院に位置付く虚空蔵山中腹の岩屋社とともに密教や修験道に関わり深い仏像である虚空蔵菩薩を安置する。岩屋神社を擁する虚空蔵山はかつて山岳信仰と深く関わった山と考えられ、神亀元年(724)の開創と伝わる中興以前の長安寺の元々の姿は山岳信仰に関わりの深い寺院だったと考えられる。次に補陀寺は、かつて会田小学校体育館付近にあり幕末に廃寺となった真言宗寺院である。山号を岩井山と称し、千手観音を本尊とする岩井堂の観音堂を奥院とする。岩井堂周辺は弘法大師伝承のある奇岩地帯で、古くは行場となっていた可能性がある。補陀寺の本尊で現在浅間の神宮寺にある木造阿彌陀如来立像は室町時代の作とされ、開創の古さを物語る。しかし当寺も長安寺とともに伽藍の規模や元々の位置等、中世以前の姿はよくわかっていないのが実情である。

殿村遺跡における平場上での諸活動はこれらの中世寺院と时期的に重なり、当然のことながら一連の遺構がそれに関係する施設か、あるいは旧伽藍そのものであった可能性も考えなくてはならない。長安寺は天正10年(1582)の会田氏滅亡とともに寺勢が衰えた後再興され、今日まで細々と命脈を保ってきたと伝承される。本書作成時点で調査の終了している第3次調査地点では、1面段階の平場に伴う遺構からわずか1片だけながら16世紀後半、永禄〜天正年間頃の中国産染付皿B2類と思しき小破片が得られている。これが判然としない平場の下限を示すものであれば、長安寺の寺勢衰退の時期とも重なってくることになり、遺跡の歴史的背景を考えるうえで大変興味深い。

以上、調査成果に若干の所見を加えた。調査で明らかになった点がある一方、また新たな課題も次々に浮上している。今後、発掘調査による考古学的な事実の積み上げとともに、周辺の文化財や地域の歴史事象についても一歩ずつ調査の駒を進めていきたい。最後に調査の助言を頂いた調査指導委員会をはじめとする先生方、調査の遂行に際し理解と協力を頂いた地元の皆様にご感謝申し上げます、本書の締めくくりとしたい。

<参考文献>

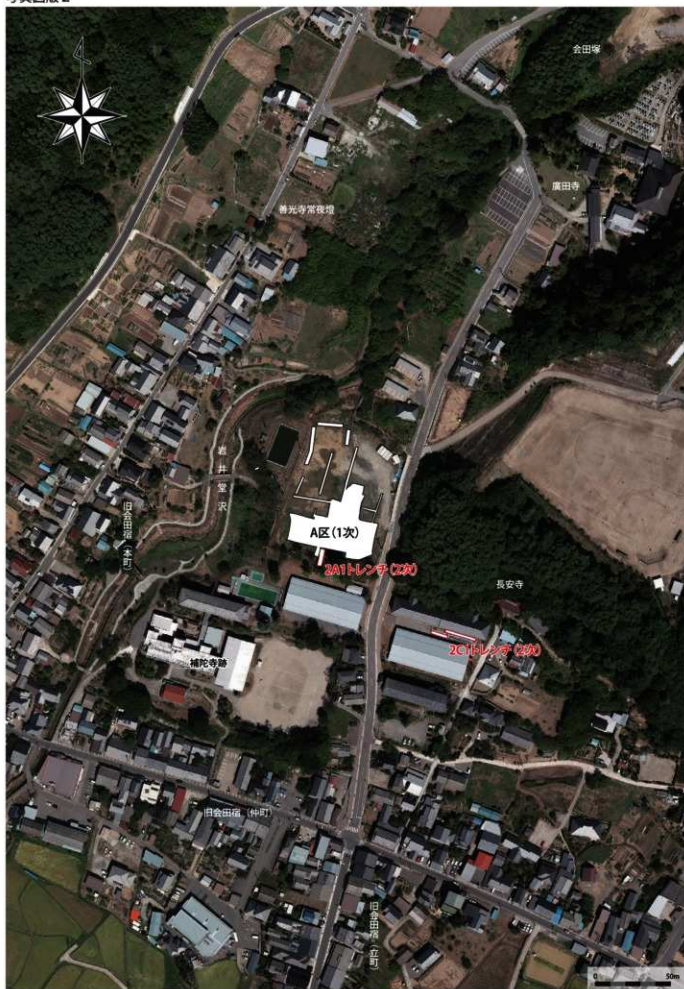
- 長野県 1936 『長野縣町村誌 南信篇』
- 原 嘉藤 (発行年不詳) 『會田氏と其の史蹟』『瀧間郷土資料 第二輯 前編 會田氏について』瀧間部支会郷土史委員会
- 四賀村誌刊行会 1978 『四賀村の社寺文化財』
- 松本景ヶ丘高校風土研究部歴史班 1979 『瀧間―四賀村の民俗と歴史―』
- 1980 『瀧間Ⅱ―虚空蔵山信仰とその周辺の民俗―』
- 四賀村の社寺文化財誌編集委員会 1997 『四賀村の社寺文化財誌』
- 畑 大介 2006 『中世前期の村落祭祀と串状の木製品』『鎌倉時代の考古学』高志書院



殿村遺跡（●印）と会田盆地北部の地形（西から）



殿村遺跡・旧善光寺街道会田宿と虚空蔵山麓の景観（南から）



調査地の位置と周辺の地形 (S = 1 : 2500)



2A1 トレンチ全景 (西から)



2A1 トレンチ全景 (北から)

写真図版4



2A1 トレンチ 北壁土層断面(石積前空間堆積土・整地土) 同左 南壁土層断面(土塁南空間埋立土)



同上 東壁北半土層断面(石積前空間下層堆積土・2～1面形成に係る整地土・1面以降の整地土・S28以前の耕作土)



同上 東壁南半土層断面(土塁南空間2～1面段階埋立土・S28以前の耕作土)



2A1 トレンチ 西壁北半土層断面 (石積前空間下層堆積土・2～1面形成に係る整地土・1面以降の整地土・S28 以前耕作土)



同上 東壁南半土層断面 (土塁南空間 2～1面段階埋立土・S28 以前の耕作土)



同上 1面遺構完掘状況(南から)

写真図版6



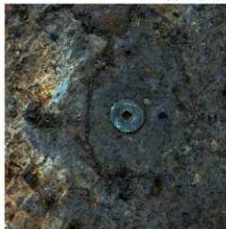
2A1 トレンチ 1面建13柱穴断面 (左:P1413、中:P1416、右:P1415、いずれも西から)



同上 1'面整地土内の礫検出状況 (南から)



同上 2面当初面完掘状況 (南から)



2A1 トレンチ 2面溝 1427・P1425

同左 銭出土状況



同上 土塁検出状況（西から）



同上 土塁北法面および石積 C 検出状況（北から）



同上 土塁南法面および石積 D 検出状況（南から）



2A1 トレンチ 土塁盛土断面（東から）



同上 土塁盛土断面（北西から）



同上 土塁南法灰の盛土および土塁南空間埋土断面（東から、左手前の礫は石積D）



2A1 トレンチ 土塁南空間 焼土 1417



同左 土塁南空間 テラス3の埋立土層断面（東から）



土塁南空間 テラス2 検出状況



同左 テラス3 検出状況



2C1 トレンチ全景（手前：2C1b トレンチ、奥：2C1a トレンチ、西から） 画面奥の道路は長安寺参道



2C1a トレンチ 中世遺構・整地土検出状況 (北西から)



同左 石列 21 (西から)



同上 中世整地土断面 (左：南壁南部青磁出土地点、中：南壁中部、右：南壁南部断面図 E-E' の地点)



同上 中世整地土断面 (左：断面 A-A'、右：断面 B-B')



2C1b トレンチ 中世遺構・整地土検出状況 (南から)



同上 礎石 1402 検出状況 (南から)



同上 P1404 断面 (南から)



同上 P1409 断面 (東から)



同上 溝 1405 断面 (断面 D-D')



同上 西壁土層断面 (中世整地土、古代包含層)



同上 北壁中部土層断面 (中世整地土、古代包含層)



同上 北壁東部土層断面 (中世整地土)



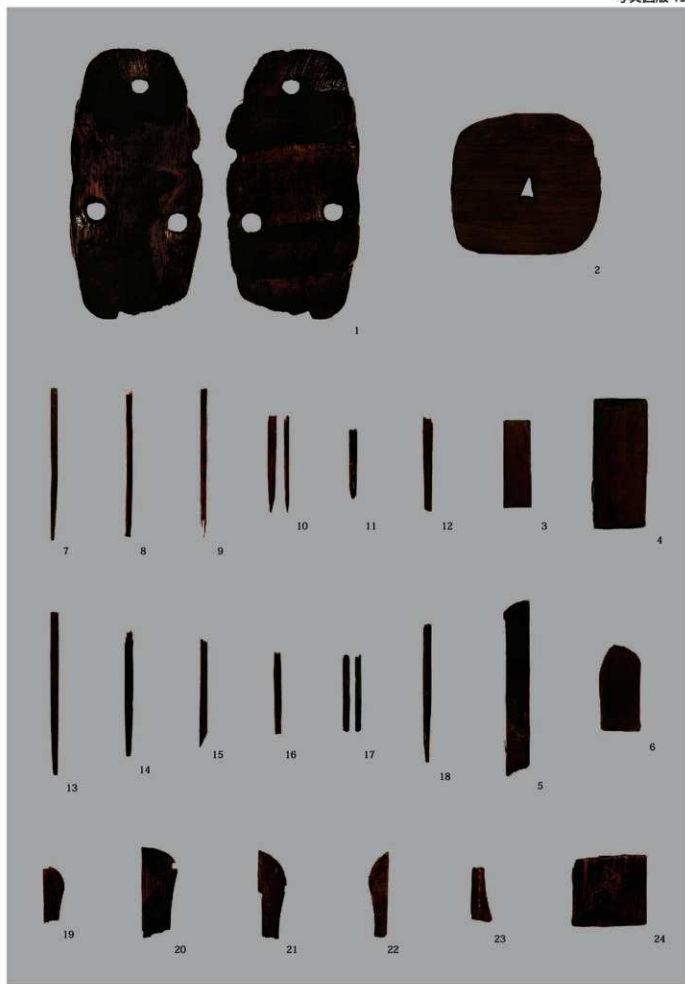
出土遺物 1 (2A1 トレンチ出土焼物) S = 1 : 2 №は図番号に一致



出土遺物 2 (2C1 トレンチ出土焼物) S = 1 : 2 №は 図番号に一致



出土遺物 3 (石製品・土製品・鍛冶関係資料) 石製品 S = 1 : 3 土製品 S = 1 : 2 №は図番号に一致



出土遺物 4 (木製品) S = 1 : 3 №は図番号に一致

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしとのむらいせきだい2じはつつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市殿村遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№210							
編著者名	竹原 学、原田健司、宮島義和							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2012(平成24)年3月26日(平成23年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
とのむらいせき 殿村遺跡	ながのけん まつもとし 松本市 あいだ 会田 536外	20202	1023	36度 21分 12秒	137度 59分 34秒	20100818 ～ 20101213	75.3㎡	範囲内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
殿村遺跡	散布地 集落跡 社寺跡 城館跡	縄紋 古代 中世	なし なし 石積 石列 集石 溝状遺構 焼土面 礎石(単独) 掘立柱建物址 ピット 土塁 テラス状遺構	2基 1基 1基 1基 1基 1基 1基 10基 1基 3基	土器・石器 土師器・須恵器 焼物：土師質土器(皿・内耳鍋) 瓦質土器(播鉢) 妬器(珠洲甕・常滑甕) 古瀬戸・大窯(天目茶碗・小碗・丸碗・ 折縁深皿・播鉢形小鉢) 中国産磁器(染付皿・青磁碗・白磁四耳壺) 石製品：硯・石臼・石鉢 木製品：下駄・曲物底板・箸状木製品・短冊状板・ 板・端材・削屑 金属製品：釘・銅銭 鑑治関係資料：埴壇・羽口・滓 自然遺物：炭化材・種実等			
要約	第1次調査で存在が明らかとなった宗教関係の施設と推測される室町時代の大规模な平場の縁辺部の状況を確認した。その結果、平場南縁を面する石積と対面して土塁が並走し、両遺構の間に幅7mの通路状空間が形成されていることが判明した。また土塁の南側にもテラス状の空間が設けられていた。通路状空間はその後の平場の拡張により埋め立てられるが、その初期の段階で箸状木製品が多量に廃棄され、近辺で祭祀行為が行われていたことを暗示する。出土遺物は1次調査に引き続き木製品の多出を見たが生活用具は少なく、器種に偏りがある。焼物や石製品、金属製品は1次調査と同様、非常に少なく、こうしたあり方が殿村遺跡の特徴のひとつとも言える。							

松本市文化財調査報告№210

長野県松本市

殿村遺跡

—第2次発掘調査報告書—

発行日 平成24年3月26日
 発行者 松本市教育委員会
 〒390-8620
 長野県松本市丸の内3番7号
 印刷 精美堂印刷株式会社